熊本県文化財調査報告　第123集

小川内（烽火台）遺跡

こごうち　ほうかだい

九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設に伴う埋蔵文化財調査

1992年

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第123集

小川内（烽火台）遺跡

熊本県人吉市大畑町下屋敷所在の烽火台跡

（北側上空撮影）

平成４年３月

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、日本道路公団の九州縦貫自動車道(八代～えびの間)建設に伴い、昭和57年から路線予定地内の埋蔵文化財の発掘調査と整理を進めて参りました。

ここに報告する熊本県人吉市大畑町字下屋敷に所在の小川内(烽火台)遺跡は、平成2年度に発掘調査を実施し、平成3年度に報告書作成を行ったものであります。

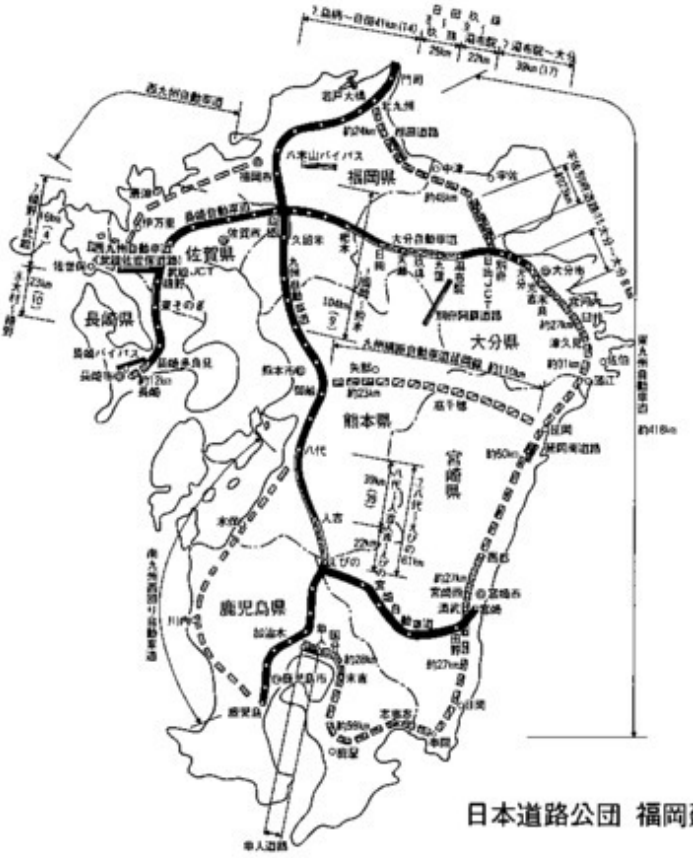
調査の結果、調査区は中世の烽火台跡地である事が判明し、さらには縄文早期の複合遺跡である事も明らかになるなどの成果を得ました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査に際しましては、多方面で日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から御配慮を賜り、感謝致しております。さらに、専門調査員の先生方からは適切な御指導がありました。ここに心から厚く御礼を申し述べます。

平成4年3月21日

熊本県教育長　佐　藤　幸　一



高速道路進捗状況表

凡	例
	供　用　中
	暫定区間供用中
	舗装工事中
	土木工事中
	設計協議中
	調　査　中
	基本計画区間
	予定路線区間

凡	例
例①	施行命令次数
例②	暫定区間供用延長(km)

一般有料道路進捗状況表

凡	例
	供　用　中
	舗装工事中

	一般国道自動車専用道路

日本道路公団 福岡建設局管内進捗状況
(平成４年３月現在)

例　言

1. 本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、熊本県人吉市大畑麓町下屋敷に所在する小川内(烽火台)遺跡で、日本道路公団福岡建設局からの委託を受けて熊本県教育庁文化課が行った。
3. 発掘調査は平成２年５月に実施、整理・報告書作成は平成３年度に行った。出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。
4. 発掘調査は大田幸博(文化財保護主事)、吉田正一(嘱託)がその任にあたった。
5. 発掘調査過程の写真撮影は大田・吉田が行い、整理後の出土遺物の写真撮影は前田一生氏が行った。
6. 出土遺物の実測は大田が担当したが、山下志保氏(熊本大学文学部考古学研究室助手)と松舟博満(嘱託)・宮坂孝宏（文化財保護主事）の協力を得た。遺構及び遺物の製図は石工みゆき(嘱託)が行った。
7. 本書の執筆は大田が行った。なお、第Ⅳ章〔２〕総括は櫻　昭志が執筆した。
8. 付論の「小川内(烽火台)遺跡と笠木越」は、村上豊喜氏(熊本県立東稜高等学校教諭)の執筆によるものである。
9. 本書に使用した地形図・字図は日本道路公団福岡建設局と人吉市教育委員会からの提供による。
10. 写真図版の空中写真は（株)スカイサーベイに委託した。
11. 報告書の作成は熊本県文化課人吉調査事務所で行い、事務所敷地については熊本県衛生部と人吉保健所の協力を得た。
12. 本書の編集は大田が行い、溝口真由美(嘱託)の協力を得た。

本 文 目 次

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第Ⅰ章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第１節　調査の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第２節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第３節　調査の工程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第４節　遺跡の位置と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

〔１〕遺跡の位置・・・・・・3　〔３〕大畑村について・・・・・・6

〔２〕歴史的環境・・・・・・4　〔４〕球磨郡について・・・・・・6

第Ⅱ章　調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

〔１〕調査区の土層について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

〔２〕中　世 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

〔３〕縄　文 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

第Ⅲ章　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

第Ⅳ章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

〔１〕まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

〔２〕総　括　　　隈　昭志 ・・・・・・・・・・・・・・21

〔３〕出土炭化物^{14}C年代測定結果報告　　山田　治 ・・・・・・・・・・・・・・22

〔付論〕小川内(烽火台)遺跡と「笠木越」　　村上豊喜 ・・・・・・・・・・・・・・23

〔再録〕『熊本県歴史の道調査　－人吉街道－』　熊本県文化財調査報告第66集より抜粋・27

挿 図 目 次

第１図　遺跡周辺地形図①及び自動車道建設予定路線・・・1

第２図　遺跡位置図・・・・・・・・・・4

第３図　遺跡周辺地形図②・・・・・・・・5

第４図　人吉市大畑町・大畑麓町周辺地形図街道及び遺跡分布図・・・・・・7

第５図　球磨郡地形図・・・・・・・・・・9
第６図　遺構全体図・・・・・・・・・・・10
第７図　土層断面図①・・・・・・・・・・11
第８図　土層断面図②・・・・・・・・・・11
第９図　SK01･SD01実測図・・・・・・・12
第10図　SK02･SD02実測図・・・・・・・14
第11図　SK03･SD03･SD04実測図・・・・15
第12図　集石･SK04実測図・・・・・・・16
第13図　SK05実測図・・・・・・・・・・17
第14図　SK06実測図・・・・・・・・・・17
第15図　SK07実測図・・・・・・・・・・17
第16図　SK08実測図・・・・・・・・・・17
第17図　SK09実測図・・・・・・・・・・17
第18図　SK10実測図・・・・・・・・・・17
第19図　SK11実測図・・・・・・・・・・17
第20図　SK12実測図・・・・・・・・・・18
第21図　SK13実測図・・・・・・・・・・18
第22図　SK14実測図・・・・・・・・・・18
第23図　出土遺物実測図・・・・・・・・・19

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・6
第２表　土坑計測一覧表・・・・・・・・・18
第３表　遺物観察表・・・・・・・・・・・20

写　真　図　版

図版１　遺跡航空写真①(南側斜め上空撮影)
図版２　遺跡航空写真②(南側上空撮影)
図版３　遺跡航空写真③(南東方向上空撮影)
図版４　遺跡航空写真④(上空近距離撮影)
図版５　ＳＫ０１検出状況
図版６　ＳＤ０１・ＳＫ０１検出状況
図版７　SK01・SD01・SK02・SD02 遺構確認状況
図版８　ＳＤ０２･ＳＫ０２検出状況
図版９　ＳＫ０２･ＳＤ０２検出状況
図版10　ＳＫ０３遺構確認状況
図版11　集石検出状況①(遠景)
図版12　集石検出状況②(近景)
図版13　出土遺物

は じ め に

〔1〕 遺跡名について

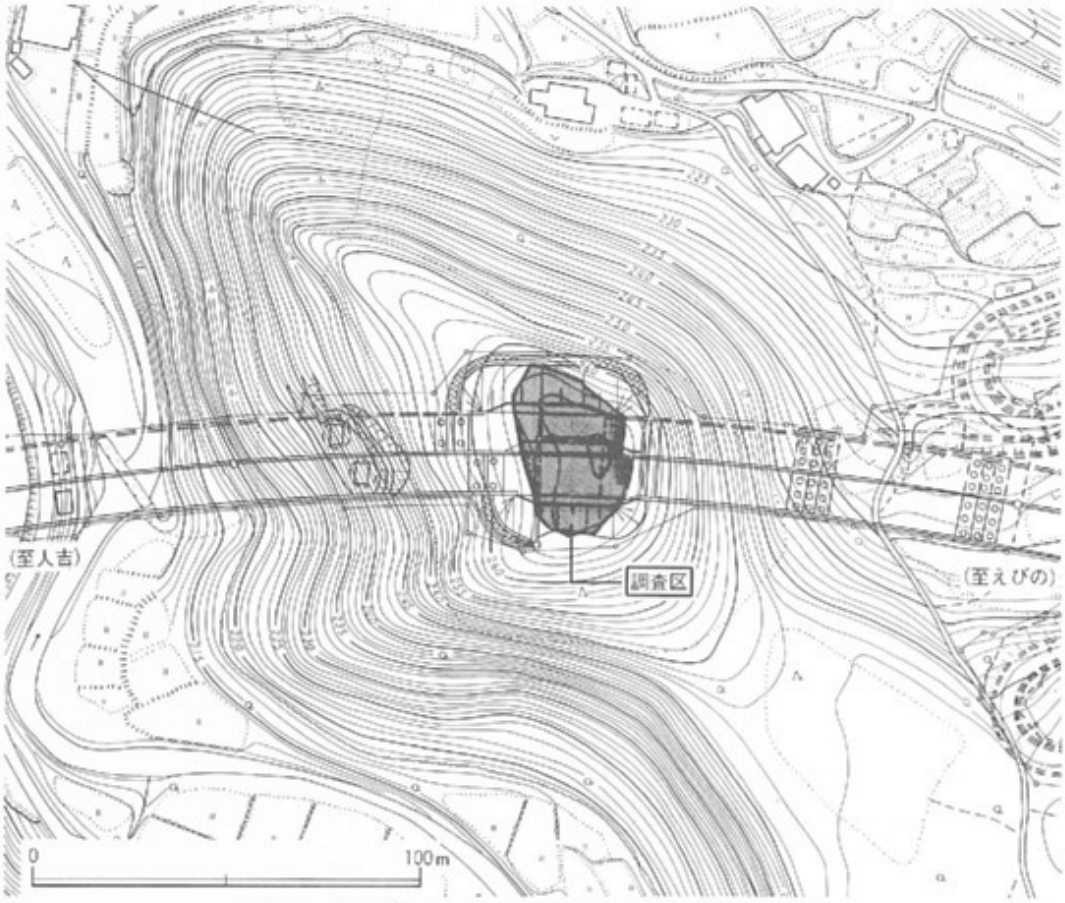
当遺跡につき、日本道路公団とは一貫して『古屋敷遺跡』という遺跡名で調査の受託契約を結び、試掘から本調査を行ったが、人吉市教育委員会が平成3年3月に出版した人吉市遺跡地図に、遺跡番号277「小川内烽火台跡」として記載されている所から、本報告書での遺跡名もこれに倣った。但し、本文中では略して小川内遺跡とする。

〔2〕 九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設と遺跡との関連について

人吉市中心部を抜けた自動車道は、ほどなく宮崎県えびの市へ向かうべく加久藤トンネルへ入る事になるが、その1.3km手前の山中に深谷を結ぶ全長 206kmの小川内高架橋が架けられる予定である。

橋脚部については、自然地形を利用して山の頂きに築かれる事になっているが、この山頂全体が当遺跡である。

調査面積は、工事予定地の約800㎡である。



第1図　遺跡周辺地形図①及び自動車道建設予定路線

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の組織

調査責任者　大塚正信（文化課長）　江崎　正（前文化課長）

調査総括　隈　昭志（主幹・課長補佐）　桑原憲彰（前文化財調査第２係長）

整理総括　松本健郎（文化財調査第２係長）

発掘調査　大田幸博（文化財保護主事、試掘・本調査）　吉田正一（嘱託、本調査）

報告書　大田幸博（参事）　松舟博満（嘱託）

石工みゆき・溝口真由美（嘱託）

専門調査員　工藤敬一（熊本大学文学部教授）　村上豊喜（熊本県立東稜高等学校教諭）

柳田快明（熊本市立高等学校教諭）

調査事務局　〔課長補佐〕　中川義孝（平成２年度）　松崎厚生（平成３年度）

〔経理係長〕　上村忠道（平成２年度）　木下英治（平成３年度）

〔主　　事〕　大広美枝子　川上勝美

日本道路公団人吉工事事務所

村田迪夫（所長）　友納　崇・久保伸一（副所長）　財津　勝（工務課長）

喜多　徹（庶務課長）　安岡東一（人吉工事長）

第２節　調査に至る経緯

当遺跡の発掘調査は日本道路公団の受託事業として熊本県文化課が平成２年５月に実施したが、調査に至る経緯は下記の通りである。

(1) 九州縦貫自動車道の未開通部分であった八代(熊本県)～えびの(宮崎県)間の自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、日本道路公団の工事計画に沿う形で、２期に分けて行った。すなわち、１期分は八代～人吉間で、昭和57年～昭和62年３月まで実施したが、２期の人吉～えびの間は平成２年度から開始し、平成４年３月に完全終了の予定である（注：八代～人吉間は昭和63年12月に開通し、人吉～えびの間は平成７年に開通予定である）。

(2) 人吉～えびの区間の遺跡分布調査は、昭和60年に行ったが、大畑(おこば)町において小川内(こがうち)番所跡(江戸時代)の裏山が路線内に含まれる事がわかった。そこで現地を踏査したが、裏山は番所跡の周辺地という性格上、人吉とえびのを結ぶ笠木(かさぎ)越の主要街道沿いにあり、山頂からの眺望も良く、見た目に中世城の砦の観があった。概して、中世城はかような地の利の所に設けられる事が多いのである。従って、中世において番所の前身的なものが置かれていた可能性もあると判断した。

(3) 試掘調査は、平成元年の８月に実施したが、任意に設定した試掘溝から土坑らしきものが

検出され、さらに、まったく予想外の縄文土器の細片も出土したので、本調査の必要ありと文書を公団へ通知した。

(4) 本調査は平成２年４月末から５月にかけて実施した。

(5) 人吉～えびの区間の分布調査にあたったのは、県文化課の隈　昭志・桑原憲彰・大田幸博・村上豊喜の４名である。試掘調査は大田が行った。本調査は大田幸博と吉田正一(文化課嘱託)の２名が担当した。

第３節　調査の工程

(1) 調査地は山中に入り込んだ所である上に、お椀を伏せた様な山で、東下の番所跡には人家がある所から、防災の点でも十分な配慮が必要であった。

(2) 従って、梅雨前に調査を終了する事が責務であると判断した。そこで、作業能率を向上させる為、バック・フォーを調査区まで登らせる事がどうしても必要となった。業者と相談したが、地形的に見ても無理ではないかとの返事であった。結局、無理に頼み込んで、0.2㎥バケット所有のバック・フォーを現地へ搬入した。しかし、それからが大変で、登頂に丸１日を要する事となった。

(3) 排土場作りについては森田林業に依頼し、山腹に土留め矢板柵を張り巡らした。

(4) 現場事務所の設置は無理であったので、麓にベースキャンプを置き、山頂に仮小屋を建てた。

(5) 調査は、バック・フォーにより慎重に表土を剥いだ。山の地形からして、堆積土は少なく10cm程で、アカホヤと礫層の地山が露呈した。

(6) 地山面を根気強く精査すると、炭化物の詰まった土坑をはじめとして、集石などが検出された。天気にも恵まれて、作業は計画通りに進行し、５月末に調査を終了した。

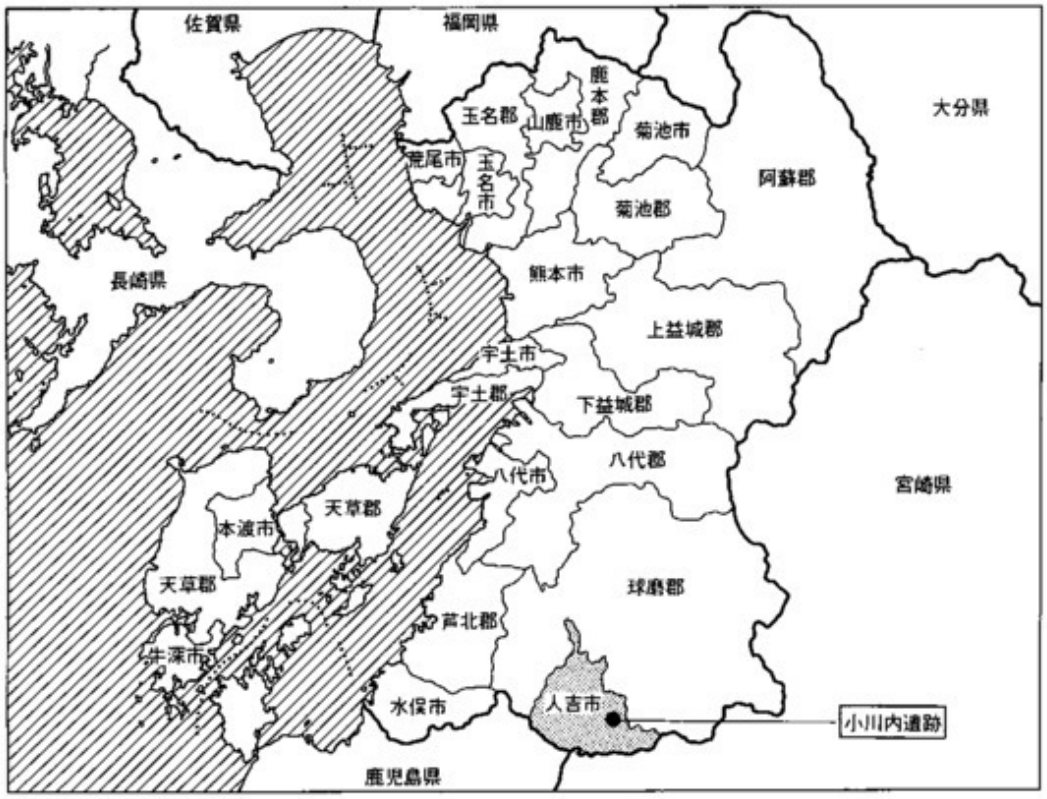
(7) 山頂に立てば周囲は連山と深谷で、木々の緑が目にしみた。もう二度と経験する事はないであろう自然環境の山中での調査は貴重であった。

第４節　遺跡の位置と歴史的環境

〔１〕遺跡の位置

① 小川内遺跡は、熊本県人吉市大畑町下屋敷の山中に所在し、国土地理院発行２万５千分の１地形図『大畑麓』に位置を求めれば、中心部は図幅北から10.2cm、西から18.7cmの所にある。

地理的には、宮崎・鹿児島両県との県境をなす「加久藤」連山の南側裾部にあたり、稜線からの地図上における直線距離は5.3kmを測る。一方、北方の人吉市街地にある人吉市役所からの距離は7.8kmで、これからしても遺跡の地はかなり奥まった山中という感がある。



第２図　遺跡位置図

② 遺跡の周辺地形

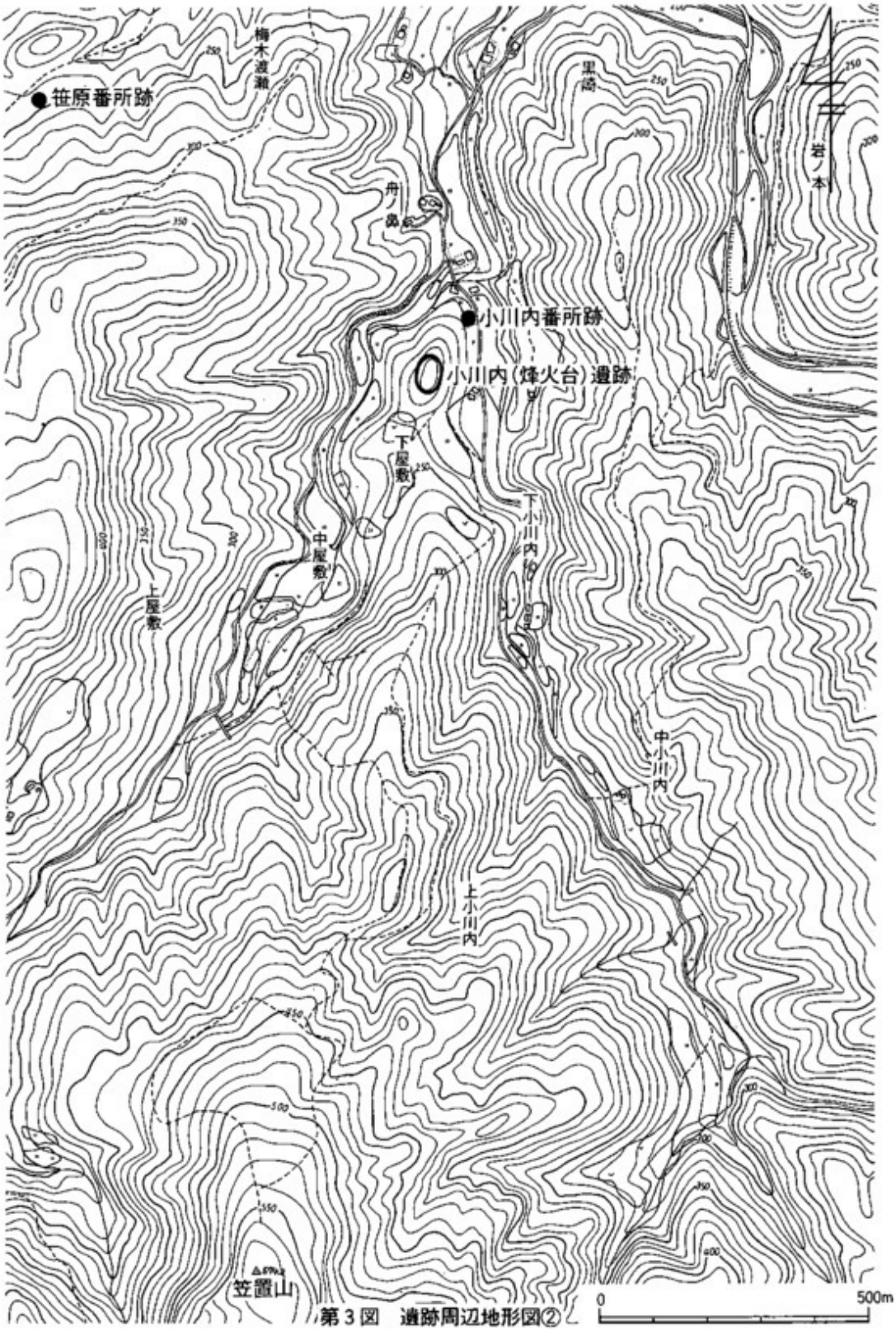
範囲を狭めて述べると、遺跡は「加久藤」連山の一峰を形成する笠置山（標高574.8m）の最北端部にあたっており、標高265.11mを測る。東側裾部の谷部との比高は50～60m程で見た目に小山という観である。

山の形状は山頂部分がお椀を伏せたようになっており、東下に上小川内川、西下を下小川内川が流れている。山の北側裾部に両川の合流点がある。なお、上小川内川の流れる迫地伝いに笠木越えの往還道が通っている。

③ 遺跡の真北２km先に大畑麓町が開けている。この点で、笠木越えの往還がまさに山中に入ろうとする所に江戸時代の番所がおかれていたのである。当該地は地理的にも重要な所であった事がわかる。

〔２〕歴史的環境

遺跡の東下に小川内番所跡があることは冒頭で述べたとおりである。関連遺跡としては、北西方向約１km先の山中に笹原番所跡がある。さらに前述の大畑麓町に縄文時代の遺跡が幾つかあるので第４図中に記した。なお、遺跡がいかなる自然環境の中にあるのかを示す為に、やや広めに地形図を掲載し、併せて遺跡名も記した。



第３図　遺跡周辺地形図②

番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代
1	村山城跡	人吉市城本町城本	室町	24	南目遺跡	人吉市七地町南目	縄・弥・古	47	永迫遺跡	人吉市赤池永無町永迫	縄文
2	人吉城跡	〃 麓町	江戸	25	赤池原遺跡	〃 赤池原町	縄文・古墳	48	烏頭遺跡	〃 赤池水無町烏頭	縄文
3	下原城跡	〃 原城町原城	室町～江戸	26	花立遺跡	〃 七地町花立	縄文・古墳	49	梨木遺跡	〃 赤池水無町	縄文
4	赤池城跡	〃 赤池原町城山	室町～江戸	27	稲荷山遺跡	〃 西間下町蓬来ケ迫	縄文	50	早水遺跡	〃 赤池水無町早水	縄文
5	東麓田城跡	〃 東麓田町中園	室町	28	蓬来ケ迫遺跡	〃 西間下町蓬来ケ迫	縄文	51	立野遺跡	〃 霧野町立野	平安
6	大畑城跡	〃 大畑町城山・鳥野	室町～江戸	29	鈴君畑遺跡	〃 西間下町鈴君田	縄文	52	柿木迫遺跡	〃 赤池水無町柿木迫	縄文・鎌・弥
7	佐無田遺跡	〃 鬼木町佐無田	鎌倉～室町	30	岩川内遺跡	〃 西間下町岩川内	縄文	53	孫四郎遺跡	〃 上麓田町孫四郎	縄文
8	杉園遺跡	〃 願成寺町杉園	弥生	31	愛宇野遺跡	〃 西間下町愛宇野	縄文	54	向原遺跡	〃 下田代町向原	縄文・古墳
9	狩所遺跡	〃 願成寺町狩所	室町	32	下鎖馬場遺跡	〃 七地町鎖馬場・高砂町	縄文	55	鎖無遺跡	〃 上麓田町鎖無	縄文・古墳
10	鼓ケ峰遺跡	〃 願成寺町鼓ケ峰	縄・弥・鎌	33	無田ノ原遺跡	〃 繁作町無田ノ原	縄文・古墳	56	下原遺跡	〃 下田代町下原	縄文
11	上の寺C遺跡	〃 願成寺町上の寺	縄文・弥生	34	千太郎遺跡	〃 繁作町千太郎	縄文	57	川添遺跡	〃 下田代町川添	縄文・古墳
12	上の寺A遺跡	〃 願成寺町上の寺・鬼松	縄文	35	茂田遺跡	〃 西間上町茂田	縄文	58	曽ノ子遺跡	〃 上麓田曽ノ子	不明
13	柴木原遺跡	〃 願成寺町柴木原	室町～江戸	36	中迫遺跡	〃 赤池町酔小路・泉仲迫	縄文・古墳	59	中原遺跡	〃 上田代町中原	縄文
14	上蛇田遺跡	〃 願成寺町上蛇田	室町～江戸	37	永谷遺跡	〃 東間上町永谷	縄文	60	大原遺跡	〃 上田代町大原	縄文
15	上の寺B遺跡	〃 願成寺町上の寺	縄文	38	白鳥平A遺跡	〃 赤池水無町立山	旧石器・縄文	61	鈴井野遺跡	〃 上田代町鈴井野	縄文
16	石治水遺跡	〃 鶴田町とのも・上鶴田	縄文	39	白鳥平B遺跡	〃 赤池水無町立山	縄文	62	馬渡遺跡	〃 大畑町馬渡	縄文
17	茶臼遺跡	〃 願成寺町善尾	縄文	40	石野遺跡	〃 赤池原町石野	縄文	63	滝水遺跡	〃 大畑町滝水	縄文
18	原畑遺跡	〃 七地町原畑	縄文	41	平谷遺跡	〃 東麓田町平谷	縄文	64	小麦野遺跡	〃 大畑町小麦野	縄文
19	七地水田遺跡	〃 七地町迫田	縄文・室町	42	後平遺跡	〃 下麓田町後平	縄文	65	大野A遺跡	〃 大野町	縄文
20	星田西明遺跡	〃 七地町星田・西明・迫田	縄文・奈良	43	能貝遺跡	〃 東麓田町能貝	縄文	66	大野B遺跡	〃 大野町	縄文
21	天道ケ尾遺跡	〃 七地町天道ケ尾	旧石器・縄文・弥	44	野田遺跡	〃 東麓田町野田	縄文	67	蔵ノ本遺跡	〃 矢岳町蔵ノ本	縄文
22	尾丸遺跡	〃 七地町尾丸	縄文・奈良	45	赤池永谷遺跡	〃 赤池水無町永谷	縄文				
23	七地遺跡	〃 七地町七地	古墳	46	外園遺跡	〃 赤池水無町外園	室町				

第１表　周辺遺跡一覧表

〔３〕大畑村について

今日、人吉市大畑町・大畑籠町・矢岳町の行政区域に含まれる。

鳩胸川の上流域で、大川間川などの支流が合流する地点に集落が開けており、北は七地村・東は田代村・西は間村・南は日向領に接する。

当村は日向や薩摩への交通上の要地で、そのために中世以来の大畑城があり、江戸時代には藩の外城が設置され、籠には郷士の居住する籠集落(現、大畑籠町一帯)が形成された。

国境には改番所が置かれていた。このような条件のため、大畑には宿場が形成され、人吉～日向、薩摩間の交易の中継点となった。

明治初期の村の状態は『群村誌』によってその一部を知る事ができる。

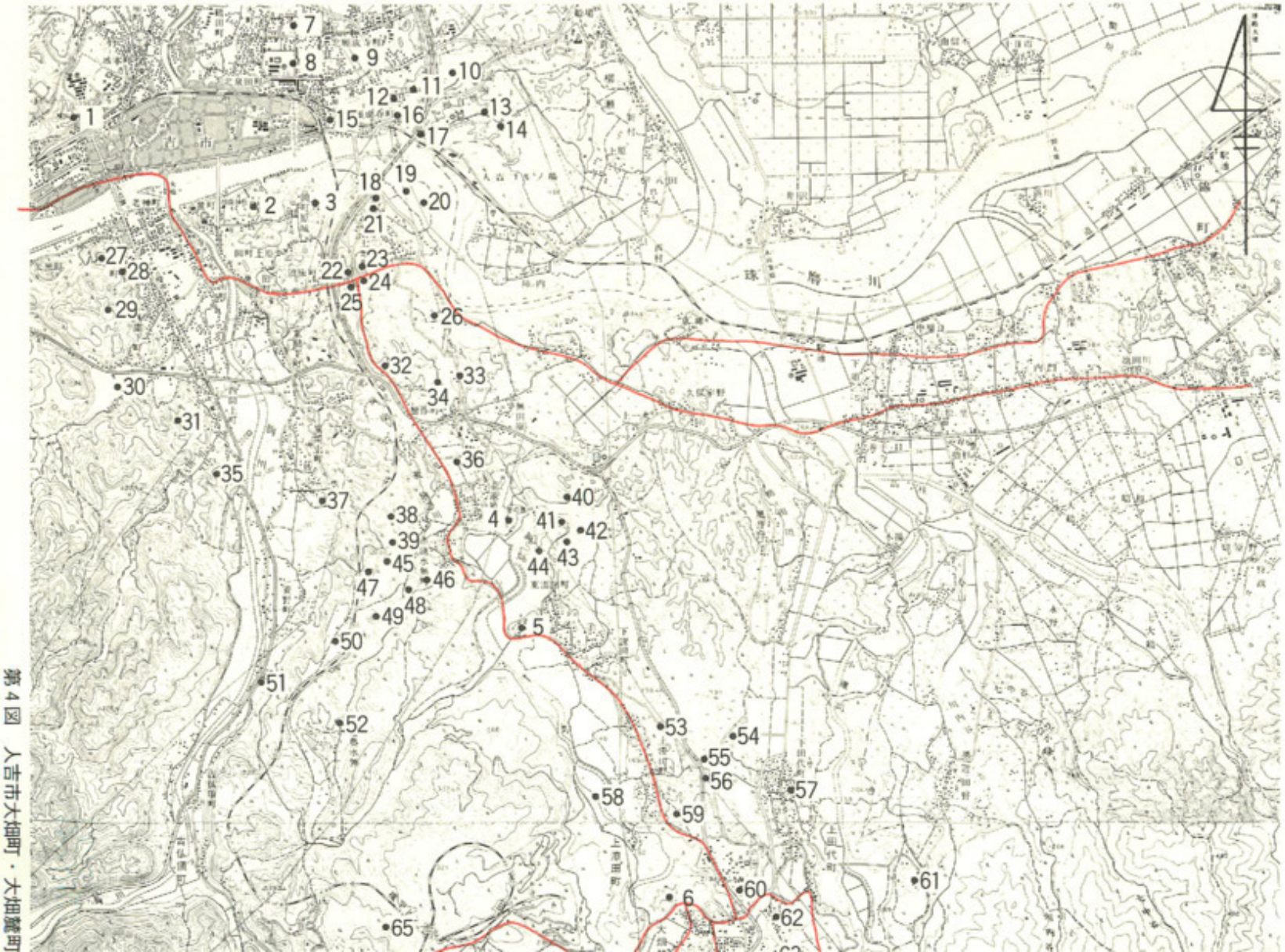
「田ハ洞田多ク水冷ニシテ成実少シ、人家半ハ山間ニ住居シ焼畑作ヲ専ニス、又炭ヲ焼キ焼畑ノ茶ヲ取リ渡世ノ一助トス、畑地ハ多ク畑草ヲ作ル、該村ノ名産ナリ、又麻芋西瓜ヲ売ル者アリ、天然ノ桑生育ス、薪秣ハ便利也、該村ハ産物多シ、舟路ノ便ナシト雖モ人吉市市街凡二里余、牛馬ニテ運輸ス、道路ハ日向国往来也」

参考：『熊本県の地名』日本歴史地名大系44　平凡社　1985年

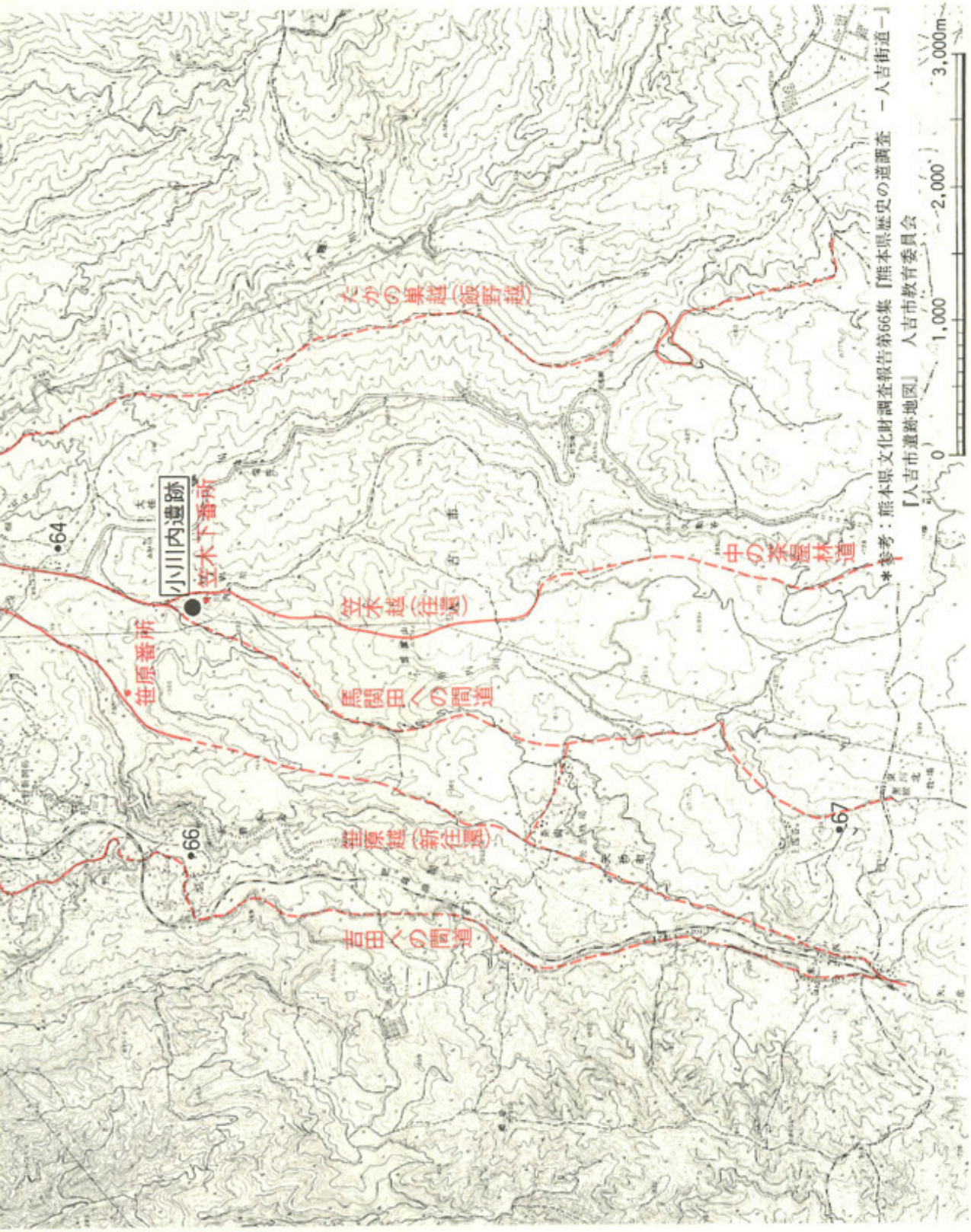
〔４〕球磨郡について

① 熊本県の南東部に位置し、北は泉村・東陽村(八代郡)に接し、東は九州山脈の背梁中にある東臼杵郡椎葉村・児湯郡西米良村(宮崎県)、南東は白髪山系を隔てて西諸県郡須木村・小林市・えびの市(宮崎県)、南は大口市(鹿児島県)、西は球磨川を挟んで芦北町(芦北郡)、球磨川下流で坂本村(八代郡)と接する。

② 周辺は九州山脈の峰々に囲まれた盆地で、球磨郡は東から西へ上球磨・中球磨・下球磨に



第4図　人吉市大畑町・大畑麓町



周辺地形図　街道及び遺跡分布図

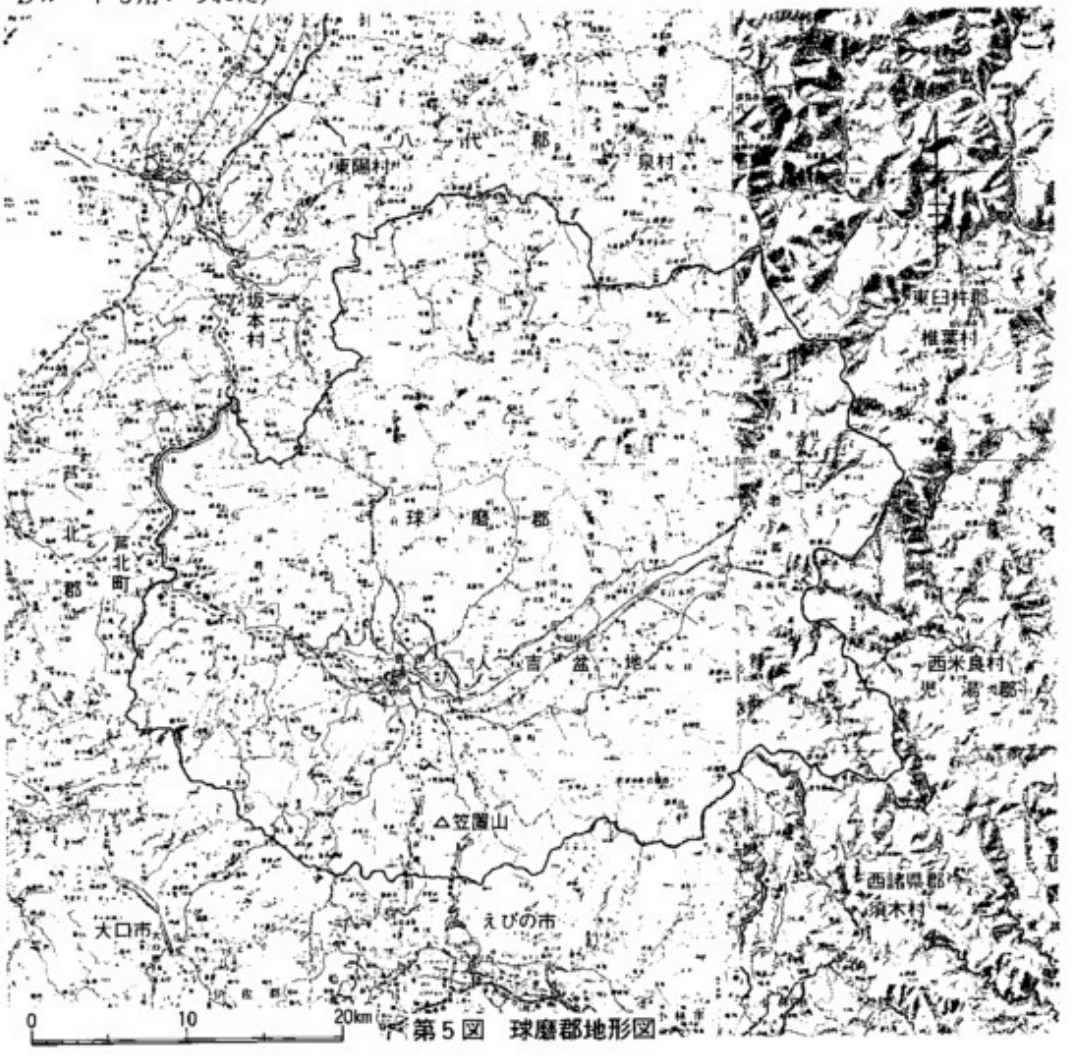
三分されている。上球磨・中球磨では中央の盆地を東北方向から南西に流れる球磨川に沿って平野が開け、周囲の山地との間に微高地に開かれた水田が形成される。

③ 北側の丘陵地からは川辺川がほぼ直角に球磨川へ流れ込んでいる。この他に盆地には免田川・仁原川・小瀬川・山田川・胸川などの大小多くの川が流れ込んでいる。

盆地の標高は東方、川上の湯前町上里で190m、川下の錦町で114mを測る。

④ 郡内の交通路は、寛文5年(1665)に球磨川水路が開削されるまで尾根道か川沿いの道に限られた。これらの主要道路としては、〔A：八代古麓(八代市)～肥後峠～人吉〕〔B：佐敷(芦北町)～告(芦北町)～一勝地～人吉〕〔C：人吉～大畑～加久藤(えびの市)〕〔D：人吉～免田～湯前～横谷〕〔E：人吉～免田～久米～湯前〕〔F：人吉～柳瀬～深田～須恵～水上〕〔G：人吉～四浦～五木～大鳥峠〕などがあった。

この内、B・Cの道は人吉までの参勤交代路で、日向路と呼ばれた。(参勤交代路はこの他Dルートも用いられた)

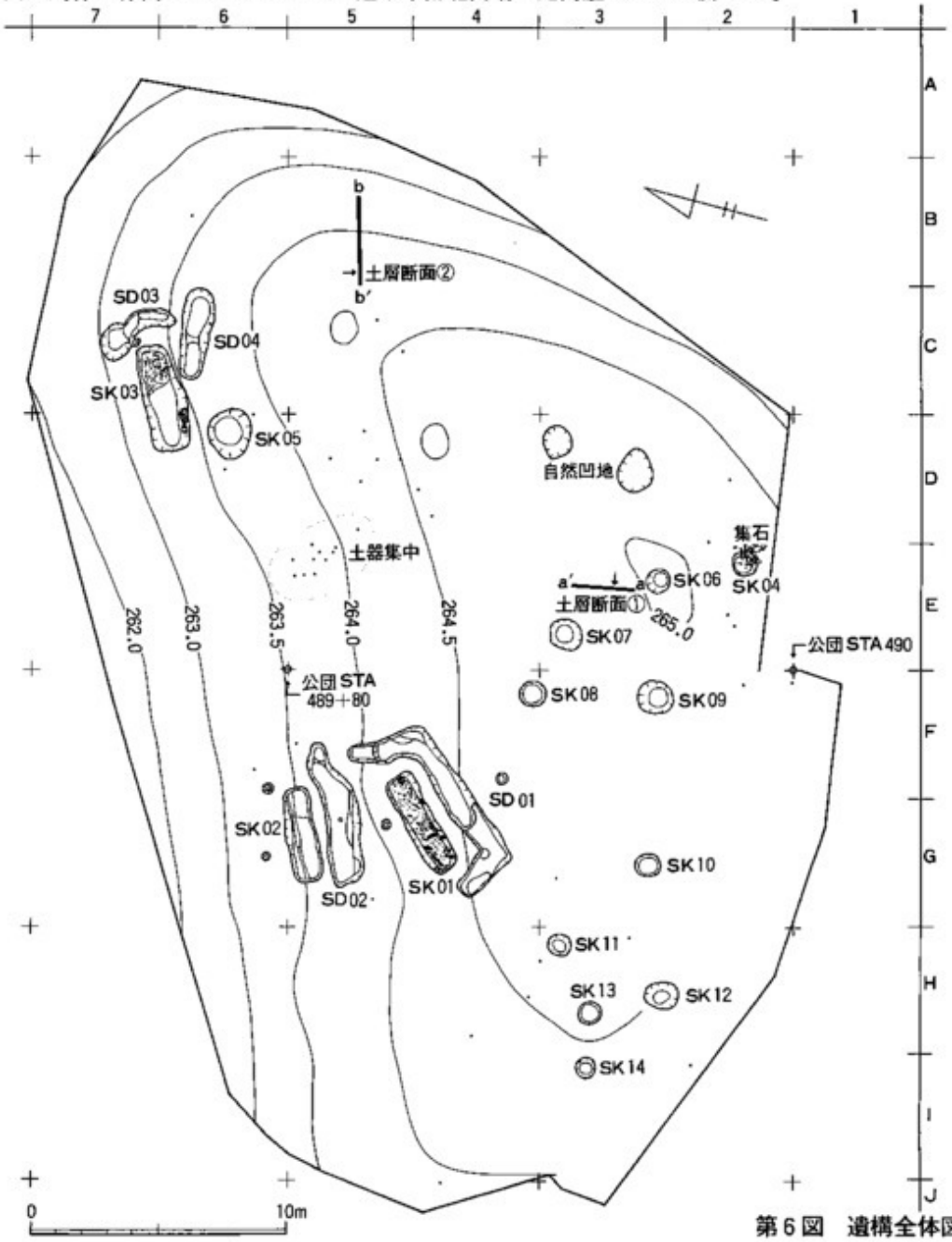


第5図　球磨郡地形図

第Ⅱ章　調査の成果

調査区に５ｍ枠のグリッド(公団のセンター杭を基準とした)を設定し、横軸は東西方向に東から西へＡ～Ｊとし、縦軸は南から北へ１～７の番号をつけた。

調査区の地形は南側から中央部分に平坦面が広がり、北側は緩傾斜地であった。高さは平坦面の周縁に標高264.5ｍのコンタが巡り、南北両端の比高差は２ｍを測った。



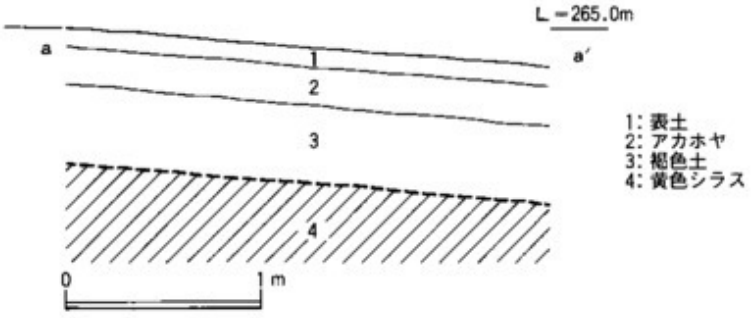
第６図　遺構全体図

遺構は、平坦面箇所から縄文時代のものと見られる円形状の土坑が11基(SK04～14)検出され(内1基は集石の下層から検出)、北側の緩傾斜地からは炭化物の詰まった3基(SK01～03)の土坑が見つかった。さらに縄文土器片の集中する箇所があった。なお、後者の3基の土坑については、炭化物のカーボン測定により15世紀前半のものとの結果が出ている。従って、ここでは調査の成果を記すにあたり、中世と縄文時代に分けて行う。

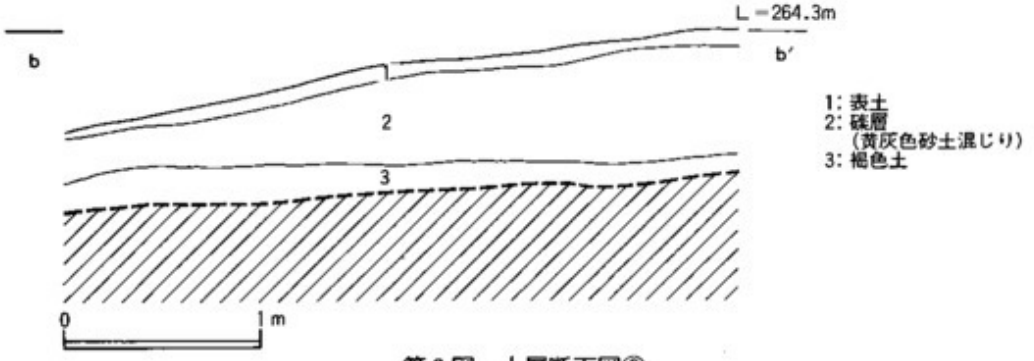
〔1〕調査区の土層について

① 標高264.5mのコンタが巡る平坦箇所(2～4－C～H)では、計測地点の3－Eにおいて、1層土が表土、2層土がアカホヤ、3層土が褐色土、4層土が黄色シラスであった。層厚は1層土が10cm、2層土が20cm、3層土が40cmを測った。しかし、調査区が土砂の流出の激しい山頂部分である所から、層序・層厚ともに一定せず、特に東側の緩い傾斜地では、表土下から洪積世のものと思われる礫層が露呈した。

② 礫層については当初、人為的なものではないかとの見方をした。すなわち、礫層が見方によっては帯状的に山頂の東縁緩斜面を巡る事から、土塁の基底部の可能性もあると解釈したのである(番所跡の裏山という場所柄も踏まえての考えである)。しかし、この事に関して最終的に5－Bに土層観察のためのトレンチを入れる事によって自然堆積である事を確認した。元来、この礫層は3層土と4層土の間層であったものと思われる。



第7図　土層断面図①



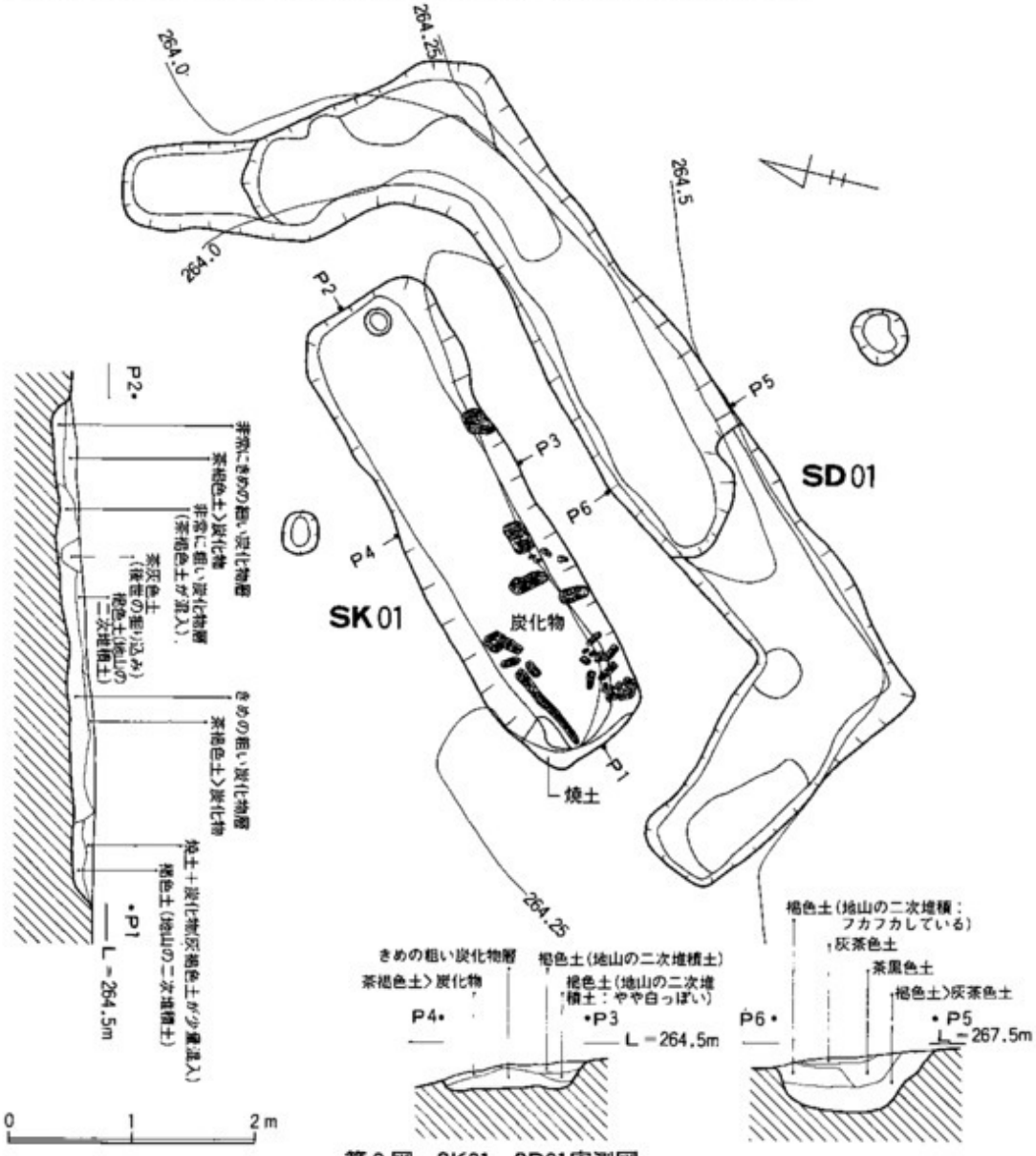
第8図　土層断面図②

〔２〕 中 世

ＳＫ０１

４・５－Ｆ・Ｇから検出されたもので、平面形状は完全な長方形である。規模は長軸4.07ｍ、短軸1.03～1.20ｍで、長軸の向きはＮ47°Ｅを測る。深さは皿状で、20cm弱にすぎないが、これは後世、遺構の上位部分が流出したためと思われる。

炭化物の塊は土坑の南縁から西側寄りにかけて多く見られるが、中には直径４cm、全長75cmを測り、原木の形状を留めたものもある。土坑の西端壁については熱を受けて赤色化している。土坑内にはきめの粗い炭化物層があり、床面は炭化物で覆い尽くされている。



第９図　SK01・SD01実測図

ＳＤ０１

ＳＫ０１を三方から取り囲む形でＳＤ０１が検出された。明らかにＳＫ０１に関連する遺構である。唯一の開口部分はＳＫ０１の北側斜面で、この事からもＳＫ０１を軸に意図的に山頂側へ向かって掘られた溝である事がわかる。

① 規模は東西方向の長さが 6.6m、南北幅は0.8～1.2m、深さは中央部分の土層断面観察箇所で 0.5m弱である。カギ型に曲がる東西両端の溝は西側で 2.5m、東側で 3.3mの長さとなる。東側については先端部寄りの床面が長さ 1.1mの範囲で僅かに高い。

② 長軸方向の溝の断面形状は隅丸の箱堀で、計測箇所での堀底幅は0.8m程である。

埋土は地山の二次堆積土の褐色土でフカフカしており、意図的に埋め戻された感がある。水成層は無く、さらに床面がほとんど汚れておらず、この事に限れば短期間の使用であったと思われる。

③ 調査中、風向きは斜面部の北西方向から山頂側の南東方向に吹き上げる事が多く、この点から遺構の性格としてＳＫ０１を烽火の穴、ＳＤ０１を防災的な溝、あるいは煙を一定幅に仕切るための溝と考えた。

但し、この事に関し、調査者が天草の富岡(苓北町)で実見した江戸時代の烽火場は、烽火の穴を土塁が取り囲んでおり、形態に違いがあった。なお、調査区の３基の土坑から出土した炭化物をカーボン測定した所、いずれも15世紀前半のものである事が判明した。ＳＫ０１及びＳＤ０１からの出土遺物は無かった。

ＳＫ０２

ＳＫ０１の北側にあって、ＳＫ０１とは約３mの距離と１mの比高差がある。長軸の向きはN60° Eで、ＳＫ０１より東へ16° 振れているが、原則的にＳＫ０１と同じ方位にあるといってよい。平面形状はＳＫ０１と同様に長方形で造りも似通っている。

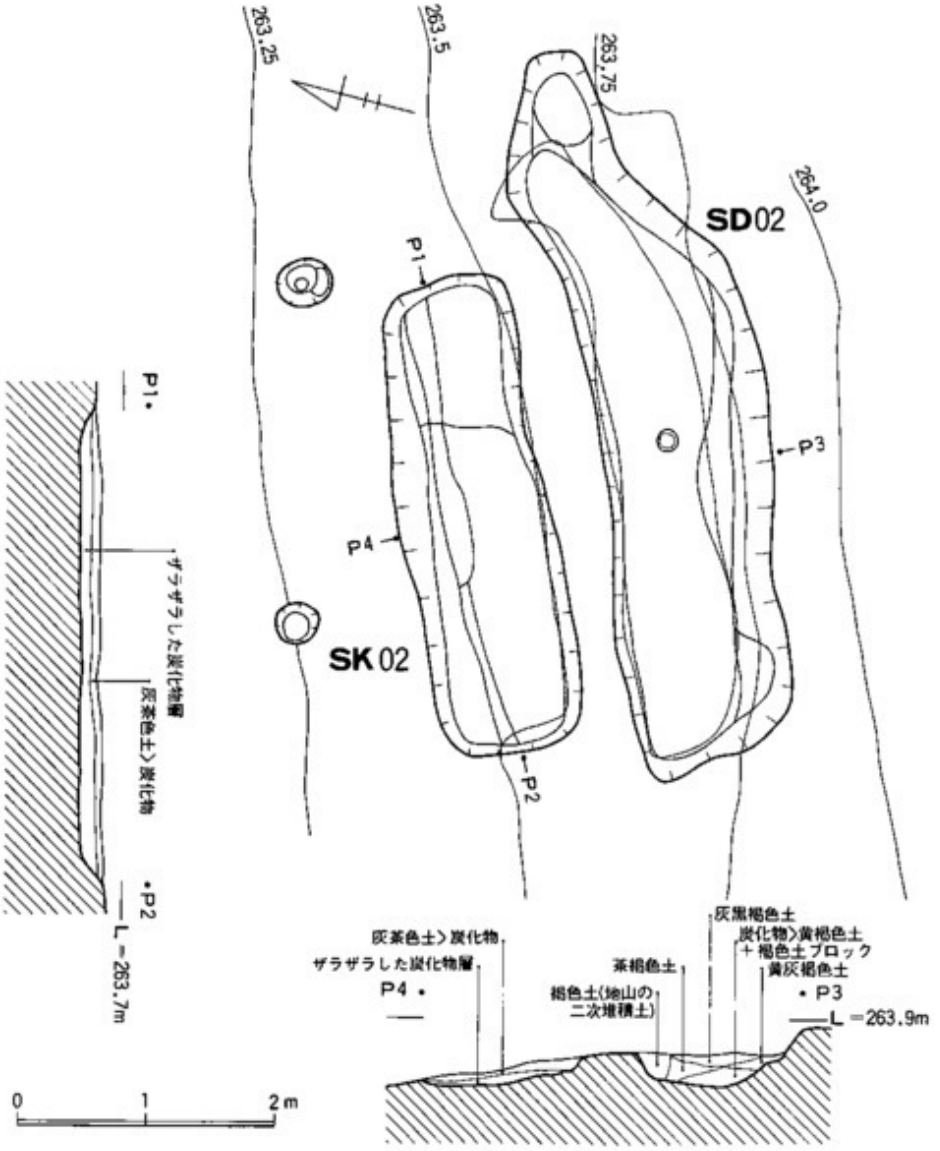
規模は長軸 3.7mで、やや小振りであるが、短軸1.0～1.2m、深さも20cm弱とほぼ変らない。長軸の向きはN68° Eを測る。但し、土坑内に炭化物の塊まりは無く、細かく砕けてザラザラした状態の堆積物として検出された。

ＳＤ０２

ＳＫ０２とセット関係にあり、ＳＤ０１と同様に山頂側に掘られている。平面形状は基本的に長方形で、カギ型に曲がる東西両端の溝は無い。

長軸 5.7m、幅は1.25～1.35mで、東側よりは長さ1.9m分が0.5～0.9m幅に括れて、やや歪な形状になっている。

溝の断面形は皿状をなし、計測箇所での深さは35cmである。埋土は５層に分層され、床面直上の埋土には、炭化物の混入を見る。これらの点に関しＳＤ０１の埋土と大きな差異がある。



第10図　SK02・SD02実測図

ＳＫ０３

ＳＫ０２から東側へ14m離れた６・７－Ｃ・Ｄの斜面部から検出された土坑である。標高263.5mと263mのコンタ内にあり、ＳＫ０２との比高は約 0.5mを測る。

平面形状は長方形で、長軸4.2m、短軸1.3～1.6mの大きさである。長軸はN64°Ｅで、ＳＫ０２と同じ向きである事が判る。

全体的に遺構の残りは悪く、土坑の深さは５～20cm未満に止まる。断面形状も完全な皿状を呈する。それでも南西側の壁面に一部、原木の形状を留めた炭化物の塊まりがある他、東側寄り長さ1.7m分については、床面に炭化物がビッシリと貼り付いている。

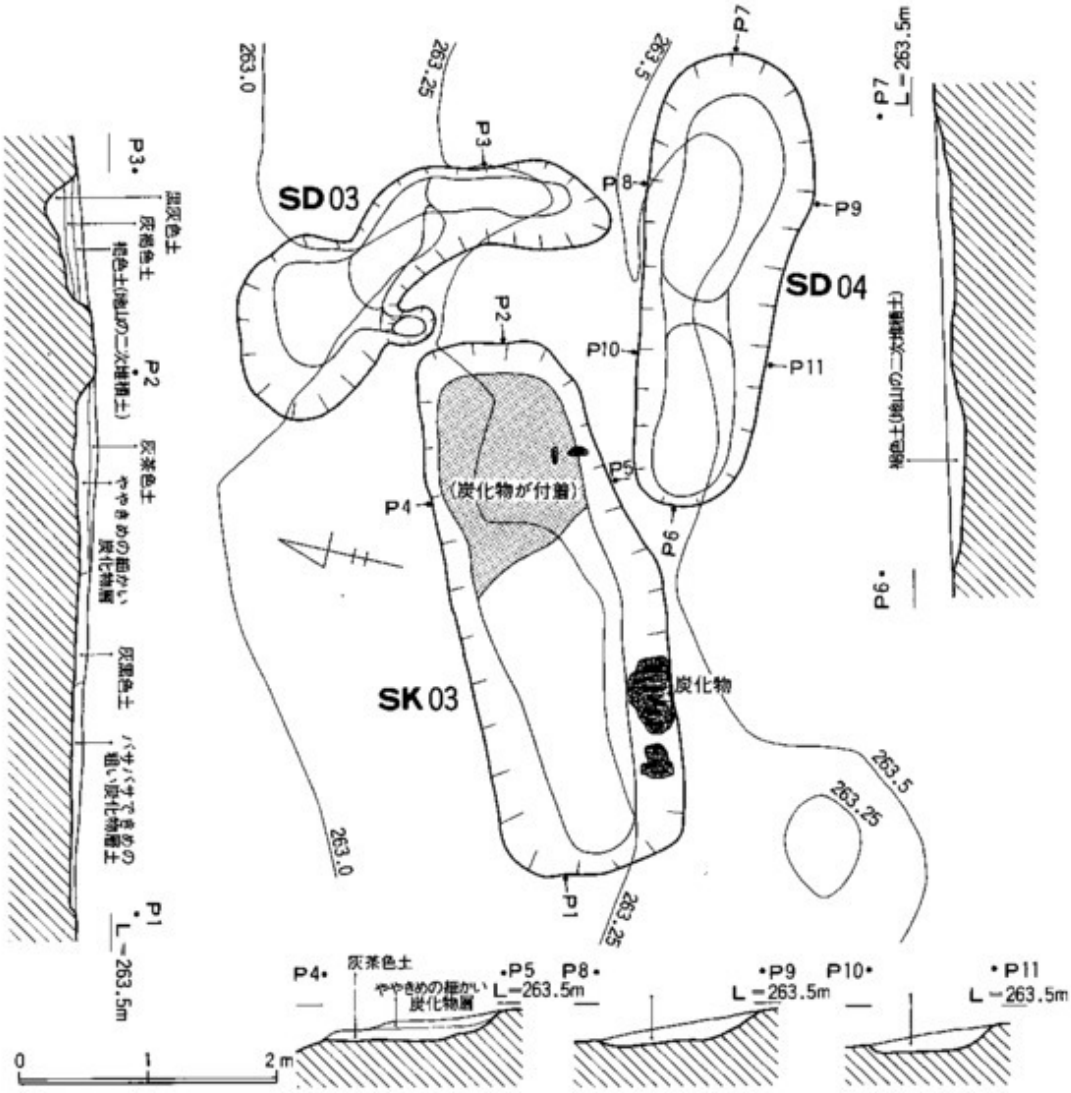
ＳＤ０３・０４

ＳＫ０１・０２の場合とやや異なっているが、ＳＫ０３の東側と南東側から直交する形で、２基の溝状遺構が検出されている。これらは遺構の上位箇所を後世、大きくカットされており、底部のみの残存に留まっているが、ＳＤ０１・０２の様に元来はＳＫ０３を取り囲む一つの溝であった事も考えられる。埋土はＳＤ０１と同じ二次堆積土の褐色土である。

ＳＤ０３はＳＫ０３の東側にあり、南北の長さは3.1m、東西の幅は0.6～1.2mを測る。平面形状はひょうたん形で、かなり歪である。

一方、ＳＤ０４はＳＫ０３の南東側にあり、東西の長さは3.5m、南北の幅は0.9～1.3mを測る。平面形状は基本的に長円形であるが、西側部分が東側に比べて、ややすぼまっている。

深さはいずれも最深で15cm程度である。



第11図　SK03・SD03・SD04実測図

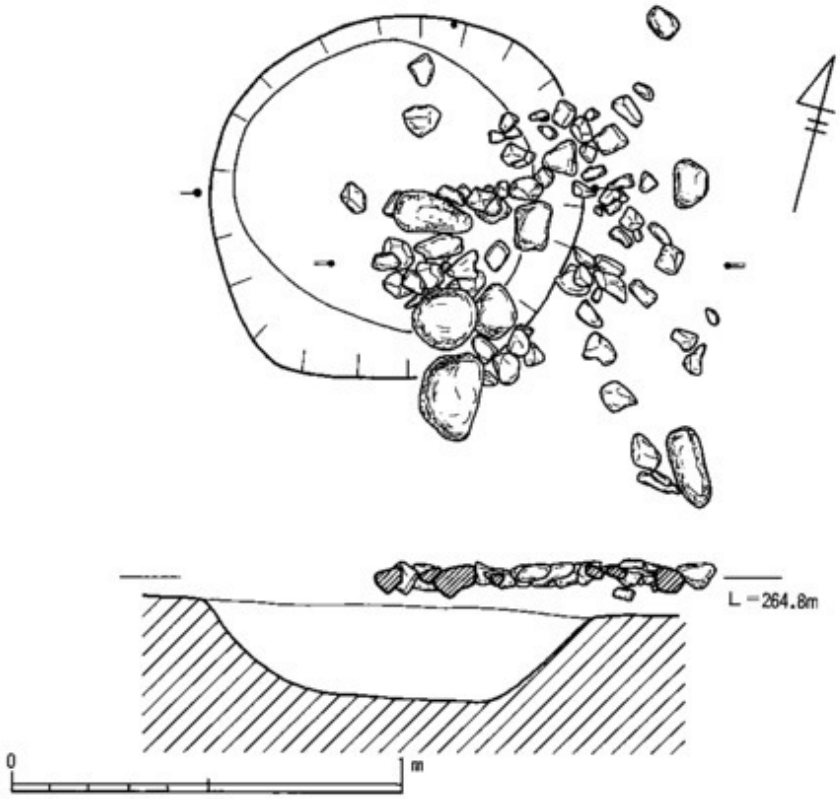
〔３〕縄　文

集　石

① 調査区の最高所にあたる２－Ｅの地山(褐色土層)から検出された。集石の範囲は東西1.1ｍ南北0.95ｍで、やや太目の砂岩質の円礫を中心に安山岩系統の角礫から構成されていた。

② やや傾斜面をなす山頂の南縁から検出されたにもかかわらず、東西ラインの集石の広がりは、まったくフラットな状態を呈する。角礫の中には熱変により赤色化しているものがある。周辺地から縄文時代(早期)の細片が５点程出土した。

③ 最終的に集石を除去して下層遺構を調べたが、深さ20cm、直径95cmを測る土坑(ＳＫ０４)が検出された。平面形状は円形をなす。



第12図　集石・SK04実測図

土　坑

① 集石の下の土坑(ＳＫ０４)の他に調査区からは10基の土坑(ＳＫ０５～１４)が検出された。内訳は２～４－Ｅ～Ｉの山頂平坦地から９基、北側斜面部の６－Ｄから１基である。

いずれも遺物が出土しなかった事から時期の確定はできないが、炭化物の出土するＳＫ０５を除いて、形状的にも集石の下層から検出されたＳＫ０４と同時期のものとみる。

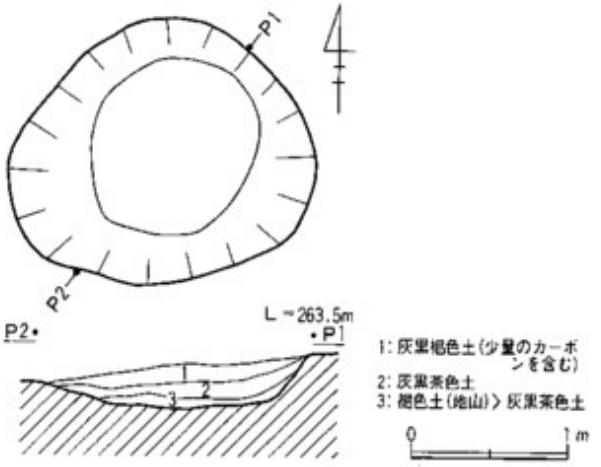
② ＳＫ０５

６－Ｄにあり、一部東縁が６－Ｃにかかる。検出地点は北側斜面部で、山頂とは１ｍの比高

差がある。

他の土坑と異なり、大型で埋土の灰黒褐色土に少量の炭化物が混じっている。北東側の隣接地に烽火の土坑(ＳＫ０３)がある所から、これにに関連した遺構であろう。

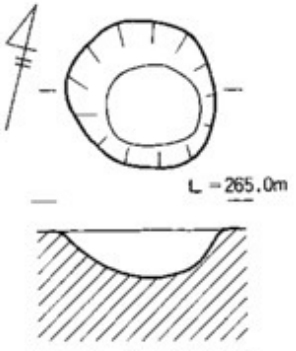
平面形状はやや歪な円形で、直径2.0mを測り、深さは計測箇所で38cmである。土坑内の埋土は３層に分層できる。



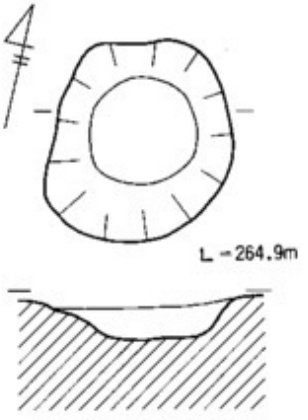
第13図　SK05実測図

③ ＳＫ０６～ＳＫ１４

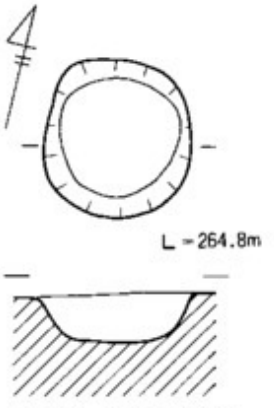
これら９基の土坑については、第２表にまとめた。埋土はいずれも褐色土(地山の二次堆積土)で、集石の下位から検出されたＳＫ０４と同じである。



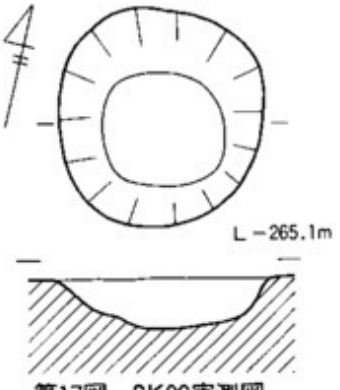
第14図　SK06実測図



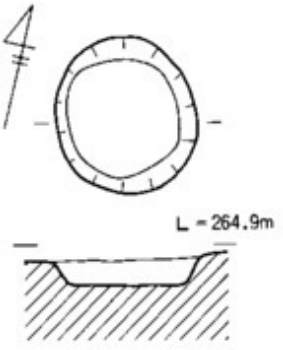
第15図　SK07実測図



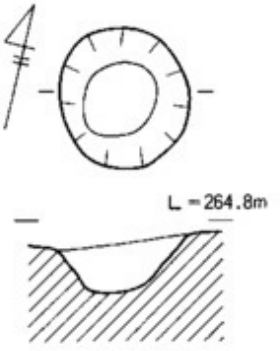
第16図　SK08実測図



第17図　SK09実測図

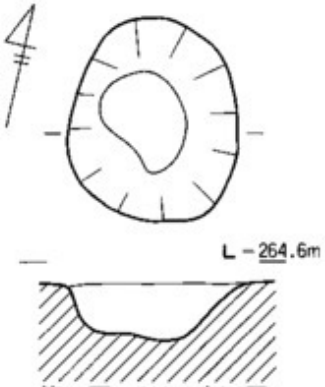


第18図　SK10実測図

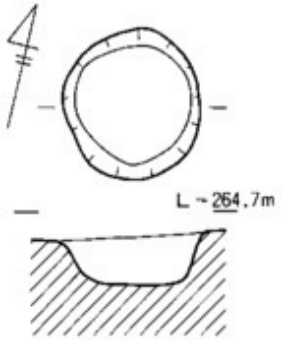


第19図　SK11実測図

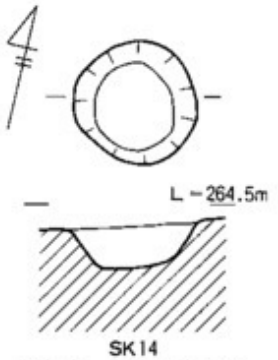
0　1　2m



第20図　SK12実測図



第21図　SK13実測図



第22図　SK14実測図

0　1　2m

土坑 No.	長 径	短 径	深 さ	出土地点	土坑 No.	長 径	短 径	深 さ	出土地点
SK06	100	92	30	E－2・3	SK11	90	82	30	H－3
SK07	140	115	20	E－3	SK12	130	108	33～36	H－2・3
SK08	100	92	32	F－3・4	SK13	96	88	30	H－3
SK09	140	130	33	F－2・3	SK14	78	75	26	I－3
SK10	100	90	17	G－3					

（単位：cm）

第２表　土坑計測一覧表

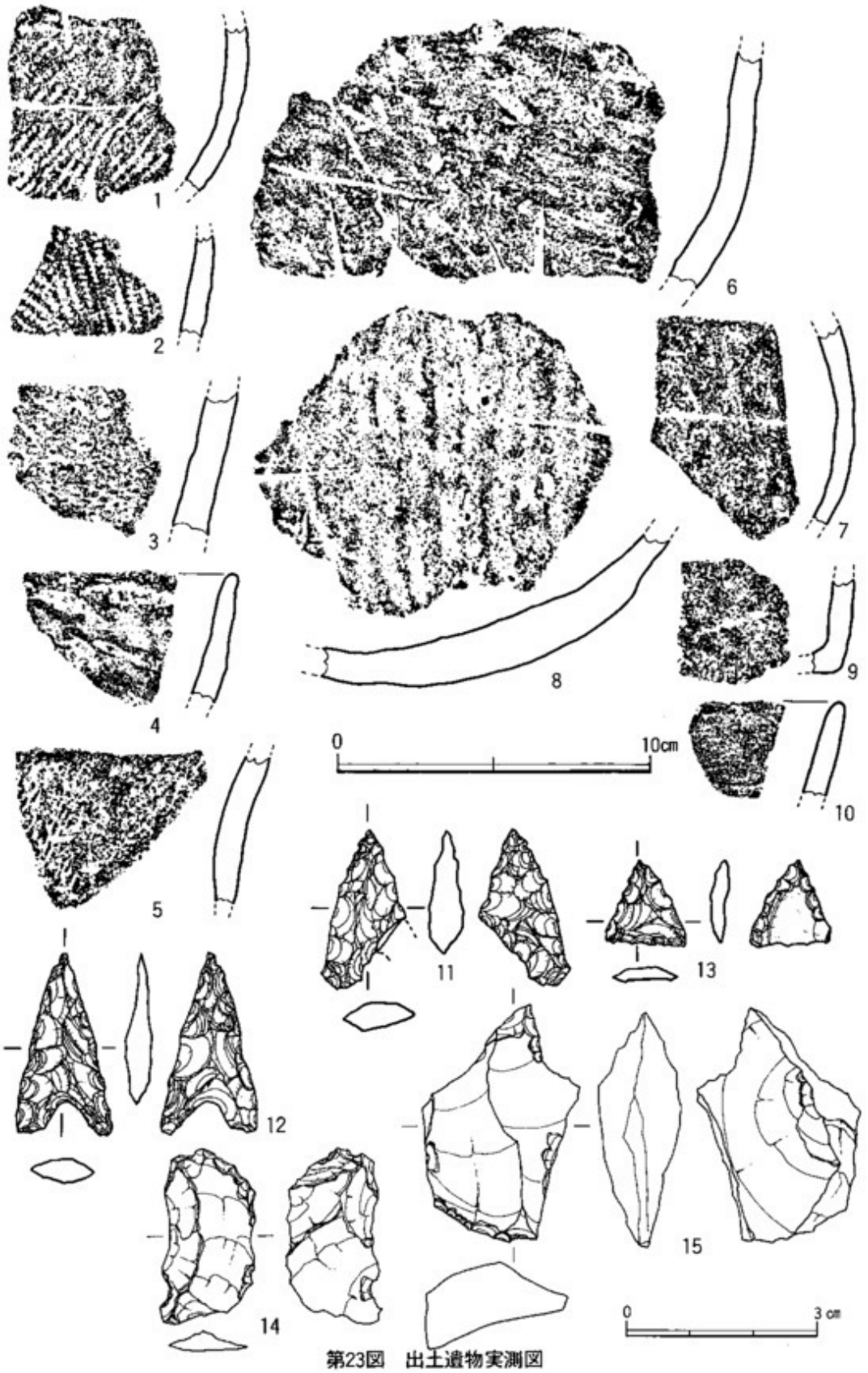
第Ⅲ章　出土遺物

遺構に伴うものでは無いが、ごく少量の縄文土器片や石鏃、及び中世の土師器が表土から出土している。

縄文土器片（１～９）　１・２は胴部片で、外器面に撚糸文が施されている。１は下位に横位の沈線文が加わる。３は胴部片で、外器面に山形もしくは楕円の押型文様がある。４は深鉢の口縁部である。外器面にヘラ状工具もしくは指頭によるナデが施されているものの、調整はかなり粗い。５は胴部片で外器面の一部に押型文もしくは撚糸らしき痕が残る。６は底部に近い胴部片で、外器面に指頭圧痕の目立つ粗いナデが施されている。７は胴部片であるが、器面のローリングが激しい。８は底部片で、外器面に不定方向のやや丁寧なナデが施されている。内器面にはヘラもしくは指頭による一定方向のナデが見られる。９は底部であるが、平底になるものと思われる。器面はローリングが激しい。

土師器（10）　口縁部である。内外器面に丁寧なナデが施されている。

石鏃(11～13)　11～13は鍬石鏃で、13は平基三角鏃である。いずれも手向山式土器に伴う縄文早期末の石器である。14・15は使用痕のある剥片である。



第23図　出土遺物実測図

No	種　類	胎　　土	焼成	色　調	調　　整	備　　考
1	縄　文 (胴部片)	軟質。 1㎜大の砂粒、金雲母、白色鉱物等を多く混入。	やや甘い	〔内外〕 鈍い黄橙色	〔外〕撚糸文。下位に横位の沈線文(?)区画文か? 〔内〕粗いナデ。	ローリングをかなり受けており、器面が荒れている。
2	縄　文 (胴部片)	密。 雲母、角セン石、黒色・白色鉱物の微細粒を多く混入。	良	〔内外〕 鈍い橙色	〔外〕撚糸文。 〔内〕丁寧なナデ。	――
3	縄　文 (胴部片)	やや軟質。密。 ごく僅かに砂粒と白色鉱物を混入。	やや甘い	〔内〕橙色 〔外〕 鈍い黄橙色	〔外〕山形、もしくは楕円押型文と思われる。 〔内〕粗いナデ。	かなりローリングを受けている。
4	縄　文 (口縁部片) 深鉢	密。 微細な砂粒、黒色・白色鉱物を少し混入。	良	〔内外〕 鈍い褐色	〔外〕6～9㎜幅のヘラ状工具、もしくは指頭による横～斜め方向のナデ。調整はかなり粗く凹凸が目立つ。 〔内〕丁寧なナデ。	――
5	縄　文 (胴部片)	軟質。密。 ごく僅かに砂粒を混入。	甘い	〔内外〕 鈍い黄橙色	〔外〕一部に押型文、もしくは撚糸文らしき痕がある。	ローリングを受けている。
6	縄　文 (底部に近い胴部片)	やや軟質。 1㎜大・稀に太めの砂粒と、黒色・白色鉱物を多く混入。	良好	〔内〕 鈍い橙色 ～赤褐色 〔外〕 鈍い橙色	〔外〕指頭圧痕の目立つ粗いナデ。 〔内〕主として横方向の粗いナデ。	かなりローリングを受けている。
7	縄　文 (胴部片)	軟質。 ごく僅かの砂粒、鉱物を混入。	甘い	〔内外〕 鈍い黄橙色	不明。	ローリングを受けている。
8	縄　文 (底部)	軟質。密。 砂粒、鉱物をかなり多く混入。	良好	〔内外〕 鈍い橙色 ～赤褐色	〔外〕不定方向のやや丁寧なナデ。 〔内〕8～10㎜幅のヘラもしくは指頭による一定方向のナデ (削りに近い)。	――
9	縄　文 (底部) 平底?	軟質。 砂粒、鉱物を少し混入。	やや甘い	〔内外〕 鈍い橙色	不明。	ローリングを受けている。
10	土師器 (口縁部片)	軟質。緻密。 微細な鉱物を少し混入。	普通	〔内〕灰白色 〔外〕 鈍い黄橙色	〔内外〕丁寧なナデ。	――

No	器　種	石　材	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重さ(g)	備　　考
11	鏃石鏃	黒曜石	2.4	(1.2)	0.5	1.27	手向山式土器に伴う、縄文早期末の石器。
12	鏃石鏃	安山岩	2.9	1.5	0.4	0.38	手向山式土器に伴う、縄文早期末の石器。
13	平基三角鏃	チャート	1.3	1.2	0.3	1.41	手向山式土器に伴う、縄文早期末の石器。素材は剥離面を残す。
14	剥　片	安山岩	2.8	1.4	0.3	1.09	使用痕がある。
15	剥　片	チャート	3.7	2.5	1.0	8.28	使用痕がある。

第3表　遺物観察表

第Ⅳ章　まとめ

〔１〕まとめ

(1) 炭化物を伴うＳＫ０１～０３については本文中でも少し触れたが、下記の理由で烽火台跡と考えるのが最も妥当と思われる。

① ３つの土坑から出土した炭化物を個別にカーボン測定した結果(測定は京都産業大学理学部山田　治教授 による)、土坑内の炭化物は15世紀前半と推定される。興味深い事にＳＫ０１は1420±10年、ＳＫ０２は1430±10年、ＳＫ０３は1410±10年と10年ごとのずれがある。土坑が使用されたのは10年を周期とする。

② 調査区は、調査の契機となった様に江戸時代の小川内番所の裏山で、東下に人吉～日向の往還が通っている。従って、中世に番所の前身的なものがおかれていたと考えてもおかしくない。真実、この様な山に番所的な役割を荷負う中世城跡が存在する事例は数多い。

③ 付論の村上豊喜氏の論文でも、調査の所見は妥当としている。

④ ①の補足であるが、熊本市にある金峰山(きんぽうざん)にも江戸時代に烽火台が置かれていた。有明海(ありあけかい)を眺望できる所であるが、非常時には山腹に自生する茅草に火を放って烽火を上げる事になっていたという。麓の河内町(かわうちまち)には番所もおかれていたが、実際の所、烽火が上げられた事は一度も無かったと聞く。この事からして小川内遺跡の場合、10年ごとの使用というのは妥当な所であろう。

⑤ 小川内遺跡の小山は北方に大畑麓町を眺望し、南側背後には加久藤連山の一つである笠置山を負っている。山越道の人吉～日向往還の入り口にあたっており、烽火台として最も適した場所といえる。

(2) 集石をはじめとして、縄文早期の土器片が出土した事は興味深い。狩猟の場であった事がわかるが、山中に深く入り込んだ縄文遺跡として興味深い。

(3) 単に江戸時代の番所の裏山という事だけで、山深い山中の調査を開始したが、中世期の烽火台跡と縄文早期の遺跡である事が判明した。

まったく予想外の調査結果であった。遺跡は思わぬ所に存在するものである。遺跡分布調査の難しさを見せつけられた調査であった。

〔２〕総　括

この遺跡は日本道路公団福岡建設局の依頼を受けて、昭和61年８月５日～６日に県教育庁文化課が行った線路内の分布調査によって、新たに発見したものである。当初は「古屋敷遺跡」と呼んだ遺跡ではあるが、その後、平成２年度の発掘調査の結果を基に、人吉市教育委員会発

行の『人吉市遺跡地図』(平成３年３月）に「小川内烽火台跡」と登載され、遺跡名を変更することにしたものである。

遺跡の位置は、人吉市大畑町下屋敷、加久藤連山の一つ笠置山の最北端にあり、標高265.11ｍの高所である。この地は上小川内川と下小川内川の合流点のすぐ南側の高台であり、東側の谷沿いには加久藤峠を越えて日向に向かう「笠木越」といわれる往還が通じており、番所跡のすぐ裏山にあたるという、交通上の要所である。

発掘調査の結果、平坦面から縄文時代の円形の土坑群、北側の緩傾斜面から炭化物を持つ長方形の土坑群を検出した。

縄文時代の遺構・遺物　最も高い位置に、ほぼ１ｍ四方に広がる集石があり、角礫の中には赤変しているものがある。その下部からは深さ20cm、直径約95cmの円形状の土坑を検出した。この他、ほぼ円形状で、床面が鍋底状の土坑が11基ある。周辺から撚糸文、押型文などの早期の土器片と石礫が見つかっており、縄文早期の遺構群といえる。

北側斜面の長方形土坑群　ほぼ等高線と平行に掘られた長方形の遺構と、カギ型及び長楕円形の土坑がセットになって計３ヶ所から検出された。長方形の掘り込み（ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ03）の中には多量の炭化物が堆積し、特にＳＫ01・ＳＫ03からは原木の形をとどめたものも見つかっており、明らかに火を焚いた痕である。これらの長方形の掘り込みの上方に並行した状態で、カギ型及び長楕円形の土坑が掘られている。

関連する遺物は少ないが、^{14}Ｃ年代測定の結果は、いずれも15世紀前半の数値が示されている。遺跡の立地する位置が前述の通り、人吉から加久藤峠を越えて日向に向かう重要なルートである事から、中世の烽火台であったと推察される。

〔３〕出土炭化物^{14}Ｃ年代測定結果報告

遺跡から出土した炭化物の年代測定を京都産業大学理学部の山田　治教授に依頼した。結果については、下記のとおりである。

平成２年１１月２日

熊本県教育委員会　御中

下記の通り熊本県古屋敷遺跡の^{14}Ｃ年代測定結果をご報告します。

京都産業大学理学部　山田　治

古屋敷遺跡の^{14}Ｃ年代測定結果

（１）採取地点	ＳＫ－１	
測定値	ＫＳＵ－２０５６	５３０ ± １０ ＢＰ（ＡＤ１４２０）
（２）採取地点	ＳＫ－２	
測定値	ＫＳＵ－２０５７	５２０ ± １０ ＢＰ（ＡＤ１４３０）
（３）採取地点	ＳＫ－３	
測定値	ＫＳＵ－２０５８	５４０ ± １０ ＢＰ（ＡＤ１４１０）

〔付論〕小川内(烽火台)遺跡と「笠木越」

村　上　豊　喜　〔熊本県立東稜高校教諭〕

1.はじめに

当該遺跡は、球磨郡から加久藤峠を越えて日向に至る、通称「笠木越」という旧街道の番所跡の裏山に位置していることに特色がある。そもそも、人吉から日向へのルートは人吉から湯前を経て横谷峠から米良へ向かうのが一つであり、もう一つが人吉から大畑を経て加久藤方面から現えびの市へ向かうルートである。第一のルートについて服部英雄氏(文化庁天然記念物課調査官)は、鎌倉時代の相良氏の年貢はこのルートによって京都に運ばれた、としている。第二のルートはさらに5本の細いルートが指摘されている。大畑から上田代へ向い日向飯野へ出る「たかの巣越」、大畑から一の渡瀬・小川内・笠置山・加久藤へと到る「笠木越」、「笠木越」の小川内から小川内川に沿い南へ向かって黒原へ出る「馬関田への間道」、大畑から大畑麓を経て矢岳で県境を越える「笹原越」、大畑麓から大野へ向い矢岳で県境を越える「吉田への間道」である。この中で、近世に番所が置かれたのが「笠木越」と「笹原越」の二つであり、街道として機能した。近世期の『明細記』によれば前者を「往還」、後者を「新往還」としている。従って「笠木越」が古いルートであったことが知れる。

2.中世の球磨郡と日向南西部

中世の球磨郡と日向南西部の加久藤盆地(中世では真幸院)の交流を物語る史料は多い。天養元年(1141)、球磨郡の住人貞倫とその舎弟六郎重平が同郡の住人守高(平河師高)をその城内より追い出し、雑物人馬・所領田畠を横領する事件が発生したが、この時、貞倫に与同したのが真幸院の住人の小郡司貞重・入田太郎貞明・草藤次貞守ら草部一族と肥後国住人八代藤三重永であった。貞倫は球磨郡の住人であるが、その名の貞からすると草部一族と考えられる。そうすると、真幸院の在地領主草部氏は国境を越えて球磨郡にも進出していたのである。草部氏は後に人吉荘田所としても活動している。逆に球磨郡の領主が真幸院に関与している例もある。建久8年(1197)の日向国図田帳では、須恵太郎が馬関田荘(現在のえびの市京町の西にあった安楽寺領荘園)の地頭であった。

南北朝期になると相良氏は同地方に積極的に進出し、14世紀前半の『相良定頼并一族等所領注文』によれば、定頼分として真幸院内田地75町、平河師又三郎分が同20町、野口平次入道分が真幸院西郷内田地75町、薙田了仙房分が同西郷吉田村田10町としている。同注文によれば、こうした加久藤地域への進出のみならず、さらに東部地域の三俣院・財部郷(現都城市付近)にも球磨郡勢力の所領が記されており、南北朝期の支配注文だけに、額面どうりにうけとることはできないにしても、日向における球磨郡勢力の伸長を見ることができよう。この相良定頼の時期には、畠山直顕の代官を真幸院の田上・稲荷山の両城で破るなどの活動も見える。このよ

うな相良氏の日向進出は、当然、南九州三国の守護島津氏勢力との抗争をもたらすことになる。明徳4年(1393)、定頼の跡を継いだ前頼は弟三人と都城に出兵、恐らく前掲三俣院・財部郷確保に赴いたと考えられるが、翌5年、島津系北郷氏の居城を攻撃したが、島津元久の援軍の前に敗退し、前頼以下四人とも討ち死にした。これによって日向における球磨郡の勢力は一掃されたと考えられる。次代の実長は、長子前続の嫁に島津忠国の娘を迎えて親島津政策を展開しており、更に忠国から都城の替わりとして薩摩山門を与えられたと伝えるが、これは島津の内紛に際して忠国を援助した見返りであるとしている。以後の前続・堯頼・長頼・為続の代には日向方面との関係を物語る史料には恵まれない。むしろ肥後芦北郡・薩摩山門・同牛尿院・肥後八代等との関係が出て来る。

戦国時代に入ると、天文14年(1545)6月16日、相良氏の当主義慈に反した一族の上村治頼と同人に味方した人吉衆が真幸へ退出している。翌15年には日向の戦国大名に成長した伊東氏が逗留地の飫肥から球磨へ到っている。戦国期の相良氏は島津への対抗上、この伊東と手を結んでいる。天文23年(1552)には肥後守護の座を大友氏によって追われていた菊池義武が2月26日水俣の袋に到着、ここから3月16日球磨へ移動している。移動の目的は「球磨ニ御登候事ハ、日州のことく御出あるべきためニ候へとも、真幸こえも米良越も事成申さす候て、」とあるように球磨から日向へ落ち延びることであった。その二つのルートとして、真幸越と米良越が挙げられているのである。この真幸越とは、1の近世期の『明細記』の記述からすると、恐らく「笠木越」を指していると考えて良かろう。「笠木越」が一級文献に見える最初である。

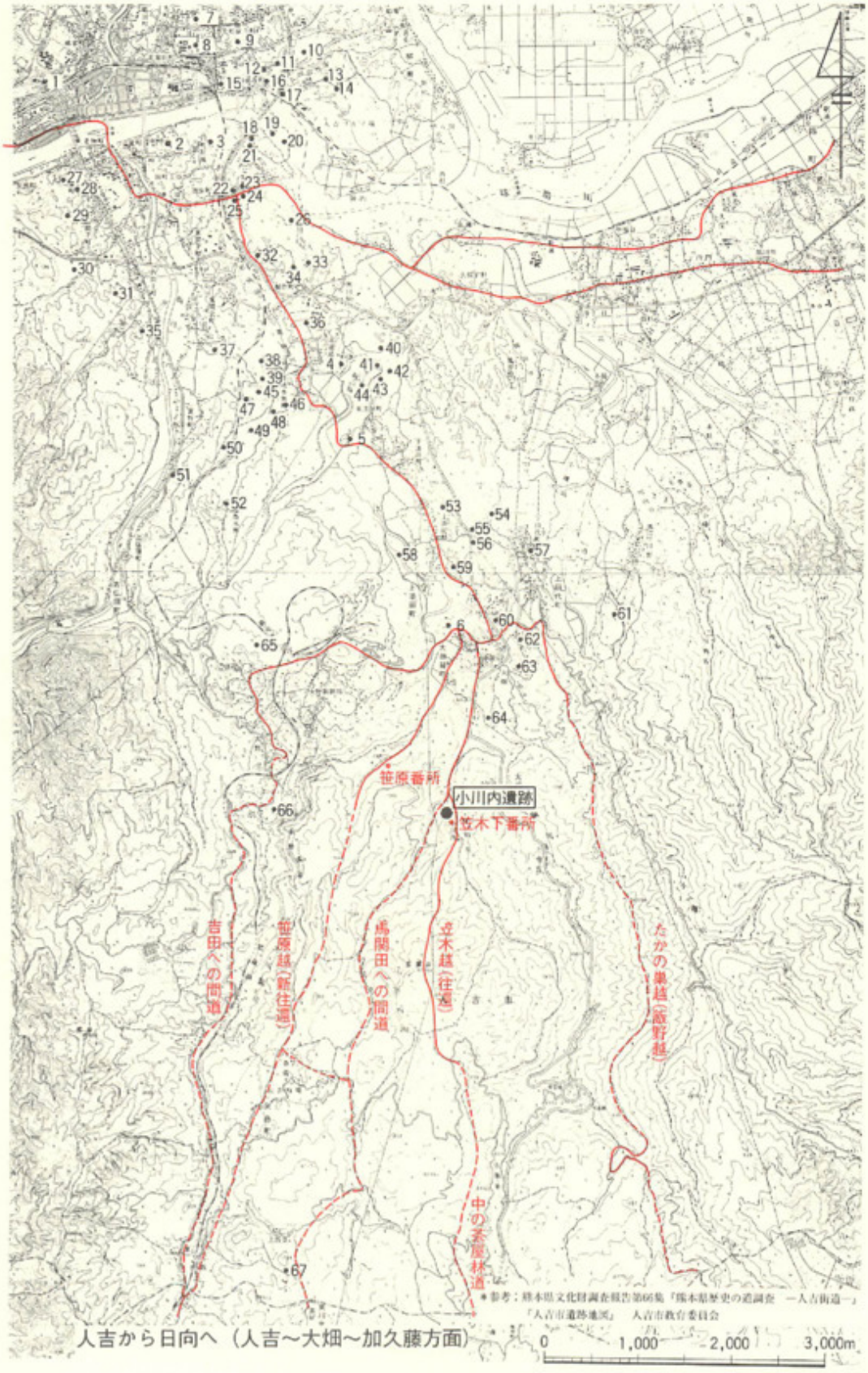
弘治2年(1556)相良氏は真幸攻撃に向い、真幸衆を打ち破っている。以後ここを前進基地として島津に備えたと思われる。翌3年8月8日、今度は真幸衆が人吉赤池口に現れ、130人が討ち取られている。同9月8日、真幸からの使者が人吉養国寺に遣わされている。恐らく前月の合戦の和議工作であろう。永禄2年(1559)3月14日には球磨から真幸へ「伏」(密偵)が出され、同24日に軍が派遣されている。恐らく島津が動いたものであろう。そして、4月12日、「日州」(伊東と思われる)から真幸へ祝儀の使者が来ているので、その動きを封じたものと考えられる。ところが、永禄5年正月になると、親島津の真幸家(北原氏)で内紛が勃発、北原民部少輔が殺害され、平方らが伊東に通じて、真幸が伊東の配下になる事態が生じた。同3月15日、相良氏の重臣団は佐敷に於いて会談。前後策を検討している。同5月10日、球磨衆が真幸に打ち入り、当主義陽も大畑城まで出陣、真幸への圧力をかけた。そして飯野(現えびの市)城在城の北原の一族又太郎に、飯野城をはじめとする五城に対する申し入れ(相良軍の管理)を条件にして、伊東勢力を駆逐したのである。平方ら親伊東派は「ミつの山」(現小林市)に後退、立てこもった。この時の出陣ルートは義陽が大畑まで来ているところから見ると、「笠木越」がその一つとして利用されたことは間違いない。一方、島津氏の方では、島津忠良が6月3日に真幸へ通ずる横河・菱刈への攻略を進めている。同14日真幸番(10日毎交替)の一番手として東弾正忠ら三名

の軍勢が真幸へ出発、6月8日には球磨からの番として佐牟田左京亮・赤池らの軍勢が、島津からの番として伊集院入道の軍勢が真幸に到着している。恐らく島津と相良氏の妥協が成立し、真幸の共同管理体制ができたものと考えられる。同8月16・23日、伊東方が真幸へ攻撃を仕掛け、北原一族上下26人が討ち死にしている。9月18日、島津は日南方面での反攻を強めたらしく、伊東の飫肥本城・サカ谷(いづれも現日南市)を落城させている。こうして、10月2日、当面の敵伊東攻略のため、島津義久と相良義陽は盟約を結んでいる。同24日三ッ山に退去していた親伊東派が飯野へと動いたが、撃退されている。11月17日、相良氏は真幸番を球磨のみではなく、領国の他の二郡(芦北・八代)からも派遣することとし、この日芦北衆が動員された。このことは、伊東(ひいては島津)に対し、領国挙げて真幸を死守する態度を示したものといえよう。翌正月3日、真幸番の八代衆を10町以上の領知者とし、在番日数を20日と決定、東左京亮方以下12名の手勢が真幸に向い、同月28日、八代へと帰っている。八代二番衆は正月24日、八代を出発。27日真幸到着、ここで島津忠良の仲介で伊東との和議の話がもち上がり、2月9日にひとまず人吉へ退去している。3月18日、伊東からの使者三名が球磨に到着、和議の話が進められ、5月2日には島津忠良・北原方よりの使者が八代に到着、和議の斡旋が行われ、6月6日、伊東より真幸・飯野・大明寺(現えびの市大明司)を相良氏に譲る旨の和議が成立した。この間5月14日には伊東方の攻撃により、真幸大明神(寺?)城が落城している。こうして伊東との真幸争奪戦に一応勝利した相良氏であったが、その後も伊東からの攻撃は散発的に続き、永禄7年7月5日、大明寺の「カコイ」で刈り働き(収穫前の稲を刈り取ること)などが行われている。しかし、伊東の脅威は一応去り、相良氏にとって最も警戒すべきは、当然島津氏である。同年2月11日、真幸に球磨・芦北両軍の兵を派遣したが、これが初めての島津忠良に対する防戦の兵であった。そして、同年3月10日「真幸通用の道求麻ヨリ造候」とあり、真幸への新道が開発され始めたのである。これが恐らく新往還「笹原越」であろう。

3.遺構との関係

当該遺跡からは、発掘調査担当の大田参事の所見によれば、烽場跡と思われる遺構が検出されている。そこからの出土炭化物のカーボン測定結果では、西暦1420年前後を示すという。文献上その年代を直接示す記事は確認できないが、南北朝期以降、当該遺跡の直下を走る「笠木越」の道が、球磨と真幸の軍用道路として活用されたことは2で示した通りである。当該遺跡の性格を烽場とする見解は文献上も極めて妥当な見解と考える。

参考文献：熊本県文化財調査報告第66集『熊本県歴史の道調査－人吉街道－』
服部英雄「空からみた人吉庄・交通と新田開発」(『史学雑誌』第87編第8号)
稚元勝弘『人吉市史』第1巻
引用史料：『平安遺文』『鎌倉遺文』『南北朝遺文』『相良家文書』『八代日記』『明細記』など



●参考：熊本県文化財調査報告第66集「熊本県歴史の道調査 ―人吉街道―」
「人吉市遺跡地図」 人吉市教育委員会

人吉から日向へ（人吉～大畑～加久藤方面）

〔再録〕『熊本県歴史の道調査　ー人吉街道ー』

熊本県文化財調査報告　第66集

(12) 大畑から県境まで（笠木越）

大畑の地名の由来は、普通焼き畑の木場から来ているといわれている。明治８年の『大畑村地誌』に「人家半ハ山間ニ住居シ焼畑ヲ専ニス」とあり、明治頃まで焼き畑が行われていたようである。

江戸期の大畑は『肥後国誌』に引く諸郷地竈萬納物寄に「一、軒数九拾九軒、内、一、八軒諸奉公。一、壱軒寺家。一、壱軒修験道。一、五拾軒郷士。一、拾五軒百姓。一拾軒又百姓。一、拾貳軒町家」と、また、『明細記』大畑の中に町とあり、恵美須一宇、庄屋、高札、別当宅など四拾軒とある。

このように大畑は町として相良藩の南側の行政の中心であるとともに、島津を意識した軍事的役割と、薩摩との茶・煙草など物資の交易の拠点という２つの性格がみられる。

番所も小川内と笹原に設けられている。

国道に重なってきた街道は、大畑を迂回するため左にゆるくカーブする国道と分かれて真直ぐ進み、坂を下る。ここは大畑の入り口で「一の坂」と呼ばれている。弘治三年(1557)八月十一日、人吉勢と薩摩勢が戦い、薩摩勢を打ち破った所で、近くにその時討ち取った首塚がある。坂を下った右側に地蔵があり、台座に「天明二壬寅年(1782)　奉造立　六月二十四日　施主水俣守右衛門」の銘がある。以前は坂の中腹にあったものを現在地に移したという。台座が逆になっている。坂を下った街道は大畑町に入るとすぐに四っ角に出る。街道は右に折れ、大畑小学校の北側に沿って進む。四つ角左手先に庄屋跡で現在石川氏宅がある。小学校の北側に沿って進むと右手に鈴野学校跡地の碑がある。大畑小学校の発祥地である。小学校の敷地の角まで進み左に折れ南へ向かう。折れずに坂を下ると大畑麓町へ出て、吉田越へとなる。南へ向かった街道は保育園の前に出る。ここは東から来た道と三又路を作っている。保育園の門の横に道標がある。高さ60cmの六角柱で「かくとうみち」、「ひとよしみち」、「ていしゃばみち」とある。ていしゃばみちとあるので、明治42年(1904)以降のものである。

南へ進むとすぐ右手に浄土真宗仏光寺派の大歓寺がある。山号は功徳山で本尊は阿弥陀仏である。『球磨郡誌』に「京都市常行寺住職橘専明説教所設置の許可を受け、明治十一年(1878)大畑三徳院跡に説教所を設け、同十八年八月二十一日、寺号公称の許可を得て、大歓寺と公称するようになった。明治十九年、本堂建築を企て、同二十年七月三十日、之を竣工し遷仏法会を挙行した」とある。

街道は南へ250m行き、再び国道に出る。その手前右手奥に大山祇神を祠った山神社がある。

街道は750mほど国道と重なって進み、鳩胸川に沿って左に曲がる国道と分かれ、真直進み

急坂を下る。道巾は150cmほどとなる。坂を下った所で鳩胸川を渡る。ここを一の渡瀬という。『歴代参考』や『明細記』にみえる。小川内に入り300mほど進み、小川内川を渡って左岸に出る。現在はコンクリート橋の舟の鼻橋が懸っている。橋を渡るとすぐ左の木立の中にブロック造りの祠があり、中に高さ70cmの自然石を立てた水神が祭ってある。正面に「天文四己未天(1535)　南無水神塔　六月造立日　施主軍左衛門」と刻んである。更に200m進むと矢岳に向かう道が右手に分かれるが、左に進みすぐ小川内川を渡る。現在は「こごうちばし」がある。そこから100m行くと右手に石垣を築いた西川勝一宅がある。近くの河野斉可氏の話によると、ここが番所跡で、裏山の迫田を「番所裏」と今も呼んでいるということであった。『明細記』大畑に「笠木下御番所」とあるのがここである。享保三年(1718)の分限帳に大畑番として高田郡助以下四名の名がある。

街道は番所前を通り、南へ向かうとすぐ右手に新しい小川内公民館が建っている。その横に炭焼き窯がある。その先から右手に分かれた坂道を登る。道巾は180cm程である。雑木林に囲まれた急な坂を200mほど行くと、急にひらけて僅かな畑がある。車が通れるのはここまでである。

街道はここから道巾70cmほどの山道になり、笠置山(標高574m)の頂上に向かって尾根伝いに急な坂を登る。『球磨絵図』をみると曲がりくねった坂道になり、その先に笠木峠とある。笠置越と呼ばれている。地元の人は木馬路と言われ、以前は材木を出すのに使っていたという。

山道に入って、30分ほど登った標高 450m付近の右側檜の植木の中に道から5m離れた場所に地蔵がある。自然石で祠を作り、その中に首が欠損し、かわりに丸い自然石を載せた地蔵が安置してある。像は首までの高さ30cm、台座は高さ9cm、巾、奥行きとも28cmあり、正面に「安政四己(1857)六月十八日　為二世安楽　大畑町　□蔵　建立」と刻んである。この地蔵について地元の人によると、古老から女の人が旅の途中ここまで来たとき、産気づき子供を出産した話を聞いたと言う。

街道は笠置山を過ぎ、更に稜線を南へ向う。ここには南の方から林道が延びてきているがこれと並行しながら進む。一部林道脇に街道の姿が残っている。頂上から1km余り言ったところで、国道のループ橋から矢岳に通じる林道に出る。ここから南のルートは今回の調査では確認することができなかった。

明治35年(1902)の大日本帝国陸地測量部五万分の一の加久藤を見ると、更に尾根伝いに南へ向い、旧国道堀切峠の西側500mのところで県境を越える道がある。また、加久藤トンネル熊本県側入口の西側旧国道沿いに「中の茶屋」という地名が残っており、現在旧国道から尾根に向かって中の茶屋林道が走っているところから大体この線に沿っているものと思われる。

国境には『明細記』に「御高札元ゟ薩州境榜木迄一里三十一丁三拾八間」とあり、標柱があったものと思われる。また、宝暦十一年(1761)の『御巡見使教令』に「日州加久藤境大畑老里山

迄人吉札之辻よ里三里三拾丁」とある。「一里山」は確定することはできなかった。

(13) 笹原越

『明細記』の「新往還丁場之事」の項を見ると、道筋は庄屋元、阿どん野渡瀬、笹原御番所下渡瀬、道還渡瀬、千段川原、大葉山、めふと木山、大境となっている。

大畑小学校から笠木越と分かれて西へ坂を下りると大畑麓町に出る。右手の山は中世の大畑城跡である。そのまま行くと国鉄(ＪＲ)大畑駅へ向かう。街道は左へ折れて大畑麓町の中を通る。しばらく行くと右に行者堂がある。修験道の修業の道場で、関係古文書がある。左側には祠の中に青面金剛がある。胸部から上を欠損しているが、地蔵の形で補修してある。光背に「奉寄進 安政二(1855)卯歳三月吉祥日　施主新助」の銘がある。街道はその先を右に折れ、集落を通り、鳩胸川を渡る。周りは水田になるがこの付近を阿どん野という。以前番所の役宅があったというが今はその跡は残っていない。その先で大川間川を渡ると街道は山に入り、道巾も１ｍと狭くなる。300ｍ行くと左側に石垣が残っている。その中央に石段があり、奥に建物の周りの石積みも見られる。一面竹と木が繁っている。笹原番所跡である。

街道は番所の前を通り、尾根を登り南へ向い、大葉山の東側を通って茶園にでる。ここから先は四谷にでるか、矢岳にでるか「めふと木山」を確定できず不明である。

(14) たかのす越

『明細記』の間道の一つとして「尾八重木之内ゟ飯野江之間道一筋有り此筋たかの巣越といふ田代村ゟ尾筋山道田代庄屋元ゟ大境迄二里貳丁廿六間ト云大畑ゟ柴笠通堂ノ元江出ル會二里三間」とある。

このルートは大畑小学校のところから左へ曲がり、上田代町へ進み、右折して段塔へ向かう道を南に行くと左側に小さな水神社がある。その先を右に分かれて山道に入る。すぐ左手上に山神神社があり、茅葺きの社殿がある。もう少し登ると馬頭観音が祠ってあり「明治廿三年(1890)二月吉日　建立田代村中」と台座にある。その脇を登り、尾根伝いに南へ進む。巾70cmの山道である。このあたりを地元ではえびのす越ともいう。尾根道はループ橋のところから東へ谷沿いに登ってきた梶原林道とループ橋から500mほどのところで出会う。しばらく林道に重なって東へ進んだ街道は一里谷の次の谷で南へ向い山を登りながら県境へ向かう。

県境には植林された中に雑木林が続いている。旧道の県境には高さ120cm、巾15cmの四角石柱があり、各面に〔 熊本縣　西諸縣郡飯野村境界標　　宮崎縣　球磨郡藍田村境界標　紀念　明治40年(1907年)９月建設 〕とある。

道を拡張したとき、ブルドーザーで押したとかで中ほどから折れて道の脇においてあった。

この石柱は、宮崎県の「歴史の道」調査報告書『肥後街道』にでてくるもので、これにより

歴史の道をつなぐことができた。場所は梶原林道を県境(標識などなく、雑木林が目印)まで行き右手に比高で50mほど登ると山道が走っている地点である。

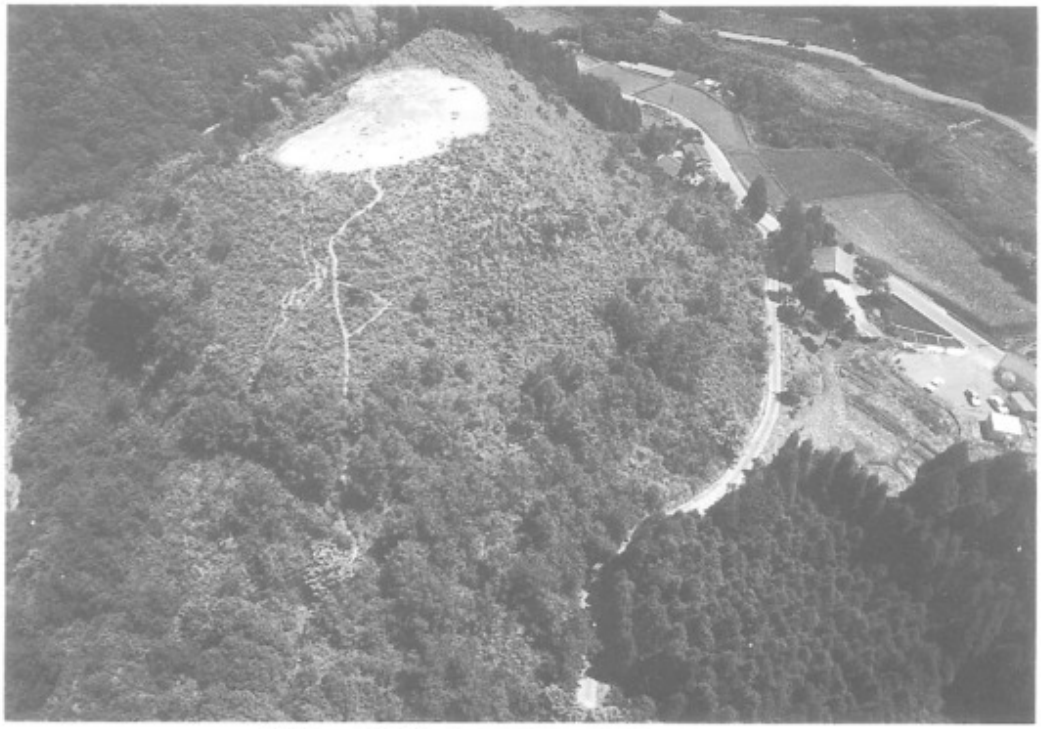
笠木下御番所跡（中央家部分）

笠木越の地蔵

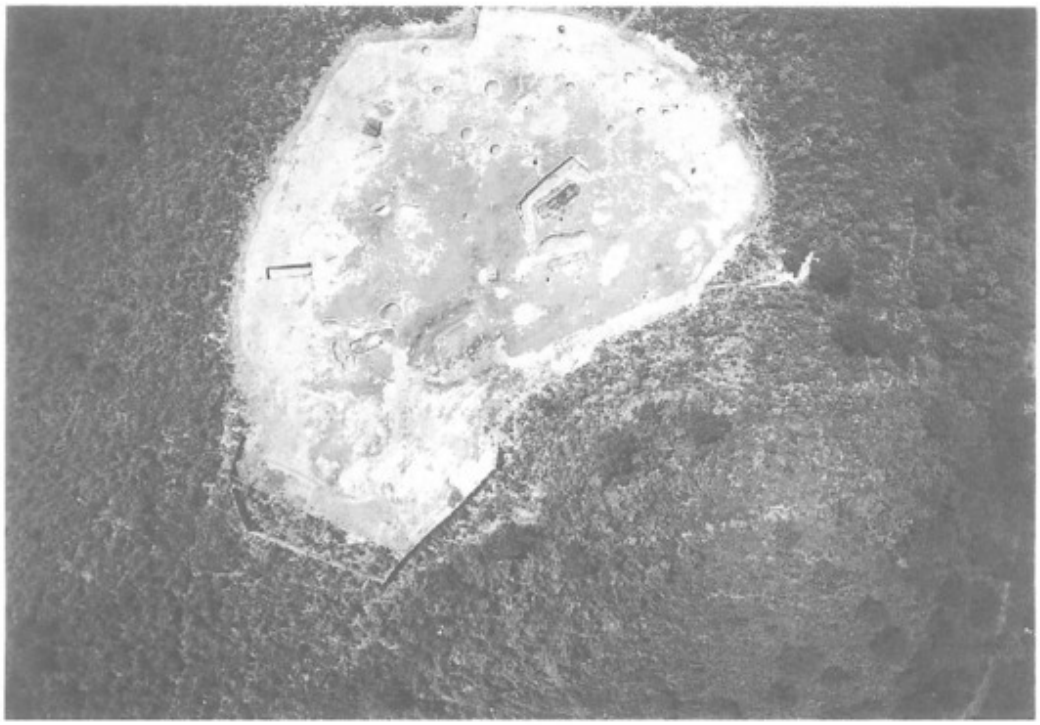
写真図版

図版１　遺跡航空写真①（南側斜め上空撮影）

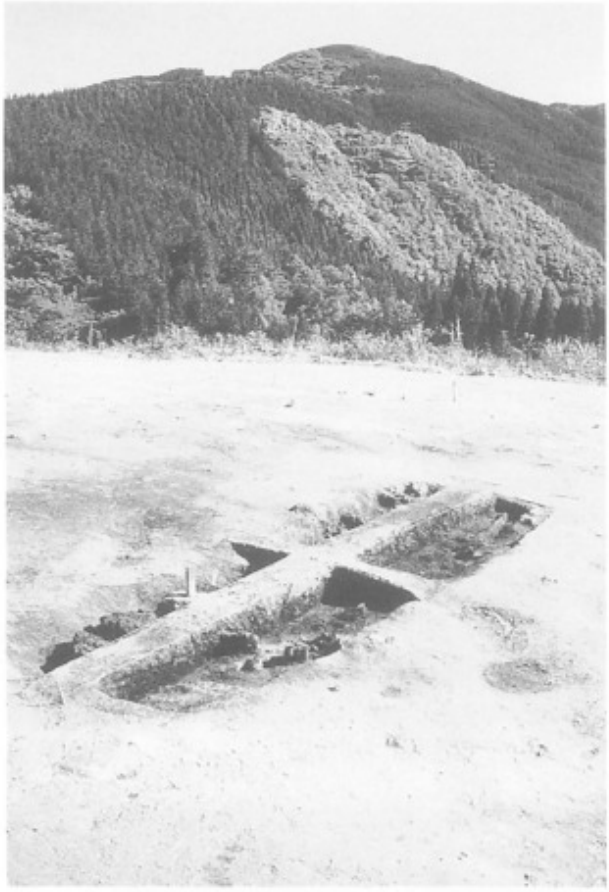
図版２　遺跡航空写真②（南側上空撮影）



図版 3　遺跡航空写真③（南東方向上空撮影）

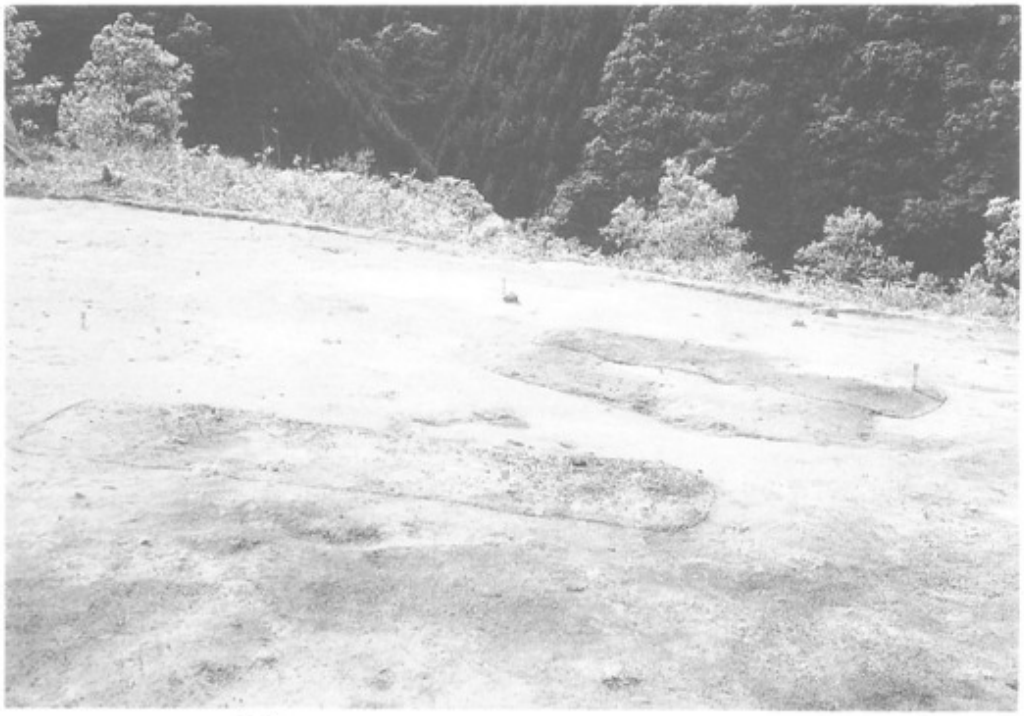


図版 4　遺跡航空写真④（上空近距離撮影）



図版５　SK01検出状況

図版６　SD01・SK01検出状況



図版 7　SK01・SD01・SK02・SD02 遺構確認状況

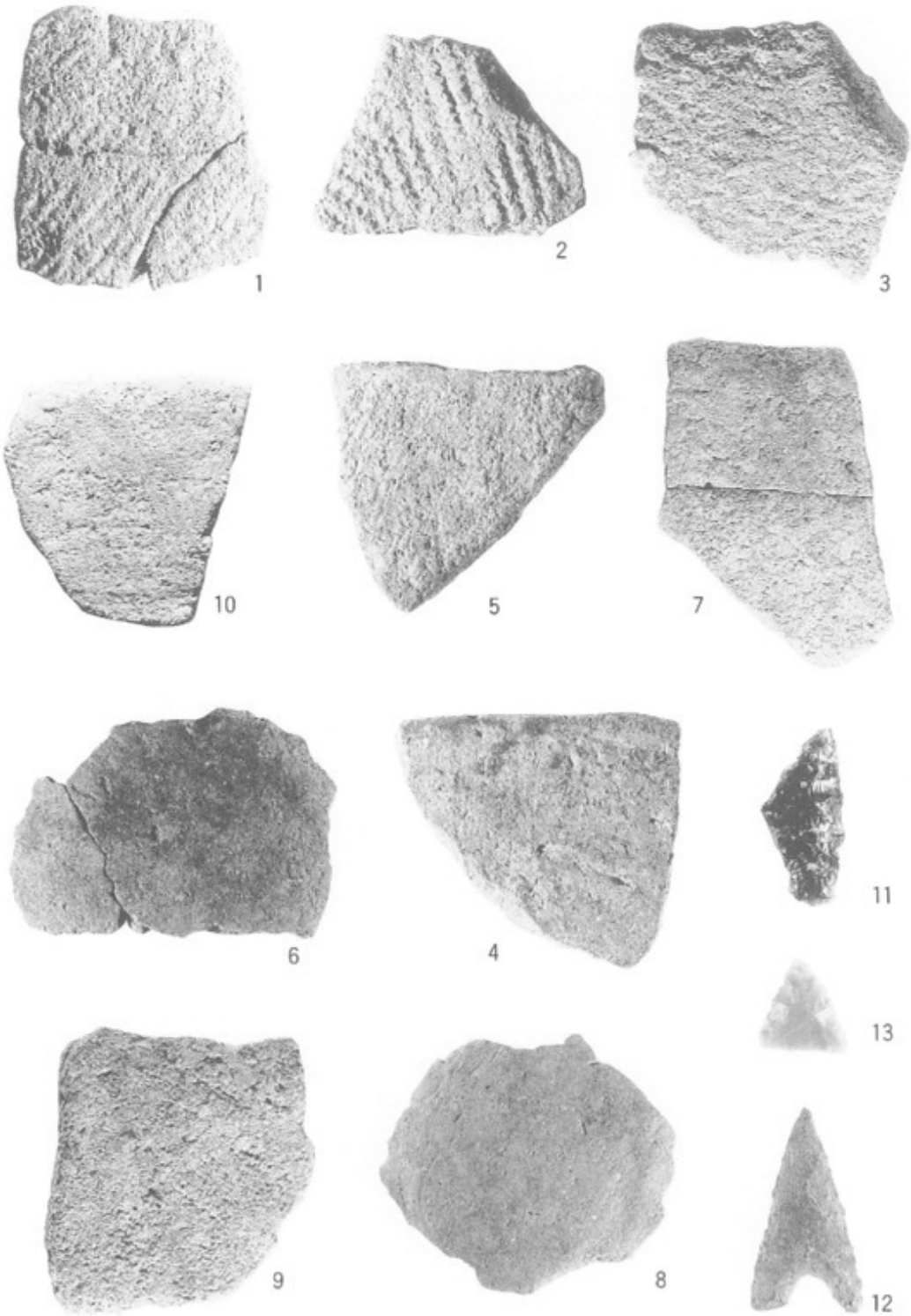
図版 8　SD02・SK02検出状況

図版 9　SK02・SD02検出状況

図版10　SK03遺構確認状況

図版11　集石検出状況①（遠景）

図版12　集石検出状況②（近景）



図版13　出土遺物

熊本県文化財調査報告第123集

小川内（烽火台）遺跡

平成４年３月２１日

編集発行：熊本県教育委員会
〒860
熊本市水前寺６丁目１－18
TEL 096－383－1111（代）
文化財調査第２係（内6716）

印　　刷：（株）大和印刷所
〒862
熊本市戸島町 920－11
TEL 096－380－0303

03 教委 教文
② 005

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 123 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：小川内（峰火台）遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日